

J. F. ハイナッツの正音法分析
—その概念規定にみる時代の先見性—

文学研究科 言語文化学専攻

ドイツ語フランス語圏言語文化学専修ドイツ語圏領域

平成 29 年度

M16LC006 もりむら 森村 あやみ 采未

目次

はじめに	2
第1章 18世紀の標準ドイツ語論争とハイナッツ	
1-1. マイセン派による正書法統一～アーデルングとゴットシェート～	3
1-2. マイセン派に対する反発	4
1-3. ハイナッツの経歴と人物像	7
第2章 正音法分析	
2-1. ハイナッツによる標準ドイツ語の規範概念	9
2-2. ハイナッツの正音法	13
2-3. 母音 (単母音、二重母音、ウムラウト)	14
2-4. 子音 (b/d/g vs p/t/k, r, -ig, -ch, sch, s/ss/ß)	24
第3章 ハイナッツの歴史的 position 付け	
3-1. ドイツ語標準発音規範の変遷	31
3-2. 現代ドイツ語の標準発音とその規範概念	36
3-3. ハイナッツの正音法研究の意義	40
おわりに	44
注	45
参考文献	52
Zusammenfassung	

はじめに

2017 年はルターの宗教改革から 500 年の節目の年であった。1517 年、ルターによるドイツ語訳聖書の完成は、言語体系としてのドイツ語の発達を一気に加速させた。しかし、そのドイツ語が標準語として統一されるのは 18 世紀まで時を待つことになる。18 世紀はドイツ啓蒙主義の幕開けにより、それまで宮廷言語にフランス語、学術言語にラテン語を使っていたドイツの貴族や教養人たちの中で統一されたドイツ語、つまり標準ドイツ語 (Hochdeutsch) への求心力が高まった。その結果、18 世紀の前半にゴットシェート Gottsched によって正書法の規範が提唱され、18 世紀後半にはアーデルング Adelung により初めて統一的なドイツ語の辞書が出版されたことで文章語 (文法・意味・用法・正書法) における標準ドイツ語の確立が決定的となった。しかし一方で、標準発音 (正音法) に関する議論はなぜか 18 世紀にはほとんど行われなかった。ゆえにドイツで標準発音の規範が定着するのは正書法統一から約 1 世紀後のジープス Siebs による『舞台発音』*Bühnenaussprache* (1898) となる。

しかし本来、規範をともなった標準語には文章語 (文法・意味・用法・正書法) と発音 (正音法) の両方のルールが包括されるはずで、例えばフランス、イギリス、日本のような中央集権の国々は政府や王室が置かれた首都の都市言語を中心に標準語のモデルが形成された。一方、18 世紀のドイツは領邦国家で標準語のモデルとなるような首都がなかった。よって、ゴットシェートやアーデルングといったマイセン地方を代表する文法家がマイセン方言を標準ドイツ語のモデルとして、標準ドイツ語の規範を打ち立てたのである。

このように標準ドイツ語の歴史を見ると、18 世紀のドイツには果たして標準発音はなかったのだろうかという疑問が生じる。そこで、本論文では 18 世紀の北ドイツの文法家ハイナッツ Heynatz (1744-1809) を取り上げ、その正音法について論じる。ハイナッツは標準文章語統一の時代とされる 18 世紀において日常の話し言葉から発音観察を行い、そこから標準発音の規範の確立を試みた人物であるという点で 18 世紀の文法家の中では非常に稀有で独創性のある人物であるが、彼の正音法研究の詳細については今日までほとんど研究がされていない。音声学という分野がまだ確立されておらず、発音規範そのものが副次的な問題とされていた 18 世紀にどのようにハイナッツは発音規範を確立しようとしたのか。さらに、ハイナッツの正音法研究の根底にはどのような規範概念があったのか。同時に今日までの標準ドイツ語発音の歴史の変遷やその規範概念も考慮しながら、ハイナッツの正音法研究の意義を再検討する。

第1章 18世紀の標準ドイツ語論争とハイナッツ

1-1. マイセン派による正書法統一～アーデルングとゴットシェート～

18世紀は標準ドイツ語の規範統一に向けて、知識人らがその規範をめぐる議論を繰り返した時代である。その結果、18世紀には文章語において標準ドイツ語の統一がほぼ完了した。この標準ドイツ語論争において、議論のそもそもの火付け役である18世紀前半に活躍したゴットシェートと、18世紀末の正書法統一に大きな影響を及ぼしたアーデルングは共に、マイセン地方（上部ザクセン地方）のドイツ語文法家として重要な人物である。したがって、ここでそれぞれの標準ドイツ語規範についての議論を見ていく。

まず、ゴットシェート(1748)は標準ドイツ語の概念について、「最も優れた作家のお手本に基づくドイツ語の標準的な形」(Wolff 1999:143)¹を提唱した。この「最も優れた作家」という表現を通して、ゴットシェートはルターを源流とするマイセン地方の作家ら知識人の用いるドイツ語の優位性を主張した。つまり、マイセン地方のドイツ語を標準ドイツ語規範の模範と捉えた上で、優れた文学作品の中に正書法の規範を見出そうとしたのだ。こうしてゴットシェートは自身の文学評論家としての視点から「理想的な」標準ドイツ語とは何かを説き、それについて書かれたゴットシェートの文法書 *Grundlegung der deutschen Sprachkunst*(1748)は周囲の根強い支持を得た。そうしてゴットシェートの文法書は18世紀後半のアーデルングの登場まで、正書法のスタンダードとして広く浸透することとなった。

一方、アーデルングはゴットシェートの死後、18世紀後半頃より正書法の統一に乗り出した。アーデルングもまたゴットシェートの正書法規範を継承するように、マイセン地方の上流階級で使われたドイツ語を標準語規範の模範と捉えた。そして何より、アーデルングは「ドイツ語史における初めての完全な辞書」(Ehrlich 2008: 24)²を編纂したことでその地位を絶対的なものにした。辞書は言語規範そのものを示す代表的な存在でもあり、³標準ドイツ語の成立にもたらす役割は大きく、強い権威を有す。したがってアーデルングの功績はその辞書の編纂をはじめ、『学校のためのドイツ語文法』*Deutsche Sprachlehre für Schule*(1782)や『ドイツ語の文体について』*Über den deutschen Styl*(1785)などの文法書において18世紀の文章語における標準ドイツ語統一を決定的なものにしたという点にある。

しかしながら、ゴットシェートもアーデルングもその標準ドイツ語規範の根底には、「上部ザクセン方言の絶対的優位性」(神竹 2006:139)を基準とした考えがあった。したがって、18世紀当時からマイセン方言に偏った言語規範に反発する声はドイツ各地であがっていた。これがやがて、標準ドイツ語論争を巻き起こすこととなり、無論北ドイツを拠点とするハイナッツも反対派の1人としてマイセン派に対立した。当時のドイツ各地の文法家たちはど

のような対立姿勢をとったのか、その全体図を次に見てみたい。

1-2. マイセン派に対する反発

イエリネク Jellinek (1913:248ff.) とファニングァー Faninger (1996:103) を元に、マイセン方言を標準ドイツ語のモデルとして捉えたゴットシェートとアーデルングのマイセン派を中心に、各地方の主な文法家を表 1 のように分類した。

表 1：マイセン派と対マイセン派の地方の文法家たち

マイセン派 Meißnische	ゴットシェート、アーデルング
南ドイツ派 Süddeutsche	アイヒンガー Aichinger、フルダ Fulda、 ナスト Nast、ボードマー Bodmer、ブライティンガー Breitingger、 ポポヴィッチ Popowitsch
北ドイツ派 Norddeutsche	ハインツェ Heinze、ハイナッツ、メツケ Mätze

18 世紀に標準文章語の統一へ向けて議論は本格化した。厳密に言えば、17 世紀にはすでに文章語の、「正しい」ドイツ語の探求が文法家たちによって」（高田・新田 2013:199）始められていた。特に北ドイツのショッテル Schottel の正書法における語幹の不変性⁴ といった理論的な言語分析の手法は広く支持され、「ショッテルが使用する Hochdeutsch という用語が、時とともに「高地」ドイツ語という言語地理的概念から「標準」ドイツ語という質的概念へと変遷を遂げた」（Ebd.:218）。⁵すなわち、ショッテルの活躍によりドイツ語の書記体系が統一されつつあった途上で、表 1 のように 18 世紀にマイセン派を中心に標準ドイツ語の規範をめぐる各地方の対立構図が浮き彫りとなったのである。これにはゴットシェートの登場が大きく関係している。⁶ なぜなら、

ゴットシェートの標準ドイツ語論争における関心事は、実際に存在する言語の慣習を包括的な規範として定める事ではなく、規則にとらわれない「芸術言語」（“Kunstsprache”）の規範を発展させていく事であった。（Ehrlich 2008:24, Ernst 2005:192）⁷

と指摘されるように、ゴットシェートのマイセン方言を模範とする標準ドイツ語規範は「理

想規範」であり、且つマイセン地方の言葉を優位と見なす権威主義的なものであった。これに対して即座に反発を見せるのが、南ドイツ派の文法家たちである。アイヒンガー(1753)を皮切りに南ドイツではゴットシェートの文法規範への批判が一気に高まった。北ドイツ派は南ドイツ派の後に続く形で、ハインツェ(1759)を筆頭にゴットシェート批判が過熱した。

とはいえ地域によって南ドイツ派、北ドイツ派と分類はされるものの、実際それぞれの文法家の立場はさまざまであった。例えば、オーストリアのポボヴィッチは「ライプチヒの教授(=ゴットシェート)の過激な反対者」(Faninger 1996:37)としてゴットシェートの文法書における不足点を指摘し、⁸ 対立姿勢を頑として崩さなかった。その一方で、アイヒンガーは「マイセン方言を含めた上部ザクセン方言の言語的優位性を認めつつ、ゴットシェートの権威主義に反発した」(神竹 2006:140)として、同じ南ドイツ派でも比較的穏健な態度をとった。そして、北ドイツ派に属するハイナッツは、

私はしかしそこで⁹ ドイツ語の初めの基礎を教えることとなり、その機会の中でまた、私はゴットシェートの『ドイツ語文法の本質』を一度ならず何度も怒りと笑いが混ざったような気持ちで読んでいたので、〔中略〕私はあのような構想を取りやめて、ドイツ語の文典の材料を集める作業に入った。(Heynatz 1803: 2f.)¹⁰

と著書である『学校授業で用いるドイツ語文典』*Deutsche Sprachlehre zum Gebrauch der Schulen* (以下、文典と略記する。)の作成のきっかけを述べる中で、辛辣な言葉でゴットシェートを批判した。このように反マイセン派の議論の性格は様々であったが、南ドイツ派と北ドイツ派の文法家ら両者に共通しているのは、ゴットシェートの「マイセン方言という限定された一方言に絶対的価値を与えること」(神竹 1996:6)に反発している点にある。この背景には、ドイツが国家としての統一が遅れたために、「彼らにとっての愛国心が「郷土愛」の延長線上にある」(神竹 2006:139)ものであったことが一つの理由として考えられる。特に、新高ドイツ語文章語の受け入れが最も遅かった南ドイツでは、¹¹ マイセン地方を含む東中部ドイツ語が基盤となった新高ドイツ語の書記体系の流入に対し、伝統的な南ドイツの上部ドイツ語を守ろうとする抵抗運動が起こった。¹² このような状況は結果的に、18世紀に起こった標準ドイツ語の規範をめぐる一連の論争において「標準ドイツ語というのは一つの地域方言の言葉なのか、あるいはすべての方言の最も優れたものを混ぜ合わせた構造であるのか？」(Scharloth 2003: 29) ¹³ という争点に終始した。つまり、現代において方言の上位に位置付けられる「超地域的(überregional)な共通語」としての標準語の概念で

はなく、方言の中に標準形となるドイツ語を見出すという捉え方からはまだどの地域の文法家も脱却できていなかったのである。ゆえに、現代の視点から概観すると、

標準ドイツ語への適切な道のりについての論理的な議論は地域的な言語形式と超地域的なそれとは異なるということを理解するのに [...]貢献したのかもしれない。しかし、その議論のレベルは高くなかった。一部の立場の中でも特にマイセン主義者の立ち位置はイデオロギー的に凝り固まり、言語についての解釈も大雑把で機械論的だった。(Reiffenstein 1985:2223) ¹⁴

と指摘される。それでもやはりゴットシェートとアーデルングの率いるマイセン派の権威は大きく、東中部ドイツ語が基盤となった標準文章語の受け入れは 18 世紀末にはドイツ全域でほぼ完了した。

しかし一方で、「文法家たちは、言語の文体における使用と口語的使用とをまだ切り離していない」(Ernst 2012:174) 状態であった。さらに、「下層民の言葉は拒絶され、上層階級の言葉が良いと判断される。にもかかわらず日常交際語 (Umgangssprache) ¹⁵と方言 (Dialekt) との間は今日の我々が使う意味合いでは区別されていない」(Ebd. :174) というように発音に関しては当時のドイツ人の中に、文章語ほど厳密な規範概念がなかった。それでも 19 世紀に入る頃には、「北ドイツの発音は模範的だとして説明された。なぜならその発音はより文字に倣っていて、閉鎖音と破裂音の明確な区別がドイツ語の標準発音として適していると示された」(Ehrlich 2008:25, Trenscherl 1997:205) ¹⁶という認識が広まった。これは 1500 年以降、「ハンザ同盟の衰退によって、低地ドイツ語の言語的威信が低下し、低地ドイツ語地域に高地ドイツ語が浸透し始めた」(高田・新田 2013:23) ¹⁷ことで、北ドイツでは元来の言葉ではない高地ドイツ語が文章語として受け入れられた。それゆえ「低地ドイツでは、文字に書いてあるとおりに発音するという習慣が長い間根付いていた」(Ebd. :32) ことが結果的に発音においては模範的だと見なされるようになったということになる。

これを踏まえて、ハイナッツの正音法を考えてみると、ハイナッツは 1770 年にはすでに文典の初版を出版し、その中でマイセン方言の発音に関する誤用を指摘し、正音法の確立を試みていた。しかも北ドイツである。しかし、これに対して匿名で批判をするものが現れたことで¹⁸、ハイナッツの正音法は「奇妙で、非常に無意味だ」(Heynatz 1772:10) と一蹴されてしまった。またこの批判は、北ドイツの言語的地位の低さから、マルクブランデンブルク人のハイナッツに「文法書を書き表したことで自体に不快感を覚え」(神竹 2006:141) た

という、嫌悪感に起因したものだったのかもしれない。つまり、発音規範に関する議論自体も活発でなかった頃から、しかも北ドイツで正音法の観点からマイセン派の言語規範に問題提起を行ったハイナッツの功績は当時ほとんど認められていなかったのである。

1-3. ハイナッツの経歴と人物像

ハイナッツは1744年に現在のザクセン・アンハルト州に位置するハーフェルベルクで生まれた。ベルリン市内のギムナジウムを卒業後、ハレ大学とフランクフルト（オーダー）大学で学び、1769年からベルリンのグラウエン・クロスター・ギムナジウムで教師としてのキャリアをスタートさせる。1775年以降はフランクフルト（オーダー）へ移り、1809年に亡くなるまで市立リツェウム（女子高等学校）で学長を務めると同時に、フランクフルト（オーダー）大学で私講師として教壇に立った。さらに1791年には同大学にて雄弁学 *Beredsamkeit* と美学 *Schöne Wissenschaft*¹⁹ を専門とする准教授となっている。したがって、ハイナッツは本業を教育者とする文法家であった。著書としては1770年の文典を初めとした、『ドイツ語に関する書簡』*Briefe, die Deutsche Sprache betreffend* (6. Bde., 1771-1776)（以下、書簡と略記する。）などといったドイツ語学の研究が知られている。

以上はADB (1880)²⁰ に記述されたハイナッツの経歴で、主に言語学の分野でのハイナッツの功績が紹介されている。しかし、ここではハイナッツの言語研究と密接に関係する、さらに詳細な人物像を述べておきたい。

まず、本業の教育者としての一面である。ハイナッツは新任教師として1769年から1775年まで6年間を過ごしたベルリンで、文法書や書簡を出版した。そのため、ハイナッツは文法家の活動を通して、「彼の知識人としての評判はフランクフルト（オーダー）への転居の前からすでに十分に認められていた」(Schwarze 1873:56)²¹ ようだ。フランクフルト（オーダー）に移ってからは高等学校 *Oberschule* の学長として、フランクフルト（オーダー）の高等教育のための学校計画²² を作成するなど、教育のより良い発展に尽力した。というのも、ハイナッツが活動した18世紀末は、教養の新たな思想として新人文主義 *Neuhumanismus* が生まれた時期である。それに伴い、ドイツでは「汎愛主義 *Philanthropinismus* と言われる教育運動があり、市民の実生活のために有用な知識の習得を重視した。つまり古典語教育を批判」(田中 2013:17) する教育者達が現れるのである。したがってハイナッツもこの汎愛主義の立場を取り、教育論を展開した教育者の1人であった。ハイナッツの教育論では「有用性や有益性のための教育においては、ニュルンベルクの漏斗 *Nürnberger Trichter*²³ を想定するのではなく、自発的かつ自律的に働く主体性を目標」(Günther 1999:58)²⁴ として掲げた。そして、「どのように能力が徐々に強化していくの

か、どのように創造力が刺激され自分で考えることができるようになるのか、そして分別をもって疑う力や、研究調査をするための情熱や多角的に物事を観察する力をどのように養い、拡大していくのかということを生徒たち自身が気づくことのできる」(Ebd.:56f., Heynatz 1799:37)²⁵ような教育の実現に邁進した。すなわち、ハイナッツはカント Kant による「常に自身で考えるという格律こそ、啓蒙である」²⁶ という一節に見られる、18世紀のドイツ啓蒙主義に感化されながら、新人文主義に基づく新たな思想も教育理念に取り入れた教育者であった。

第二に、ハイナッツの園芸愛好家としての一面も興味深い。32歳の頃から庭園を所有するほど園芸に熱心だったハイナッツは、その趣味が高じて晩年には『マルクブランデンブルク地方の家庭菜園書』*Märkische Küchengartenbuch* (1808)を執筆する。ここでも、「もっぱら、ハイナッツは観賞用あるいは花壇の庭園は重要視していなかったようだ。なぜなら、その著書で扱われるのは食用の有用植物ばかりであったのだ。」(Ebd.:59)²⁷ というように趣味の領域においても、汎愛主義的なハイナッツの思想は明確であった。そして、この著書を最後に翌年1809年にハイナッツは65年の生涯を終えたのである。

このように詳細に経歴を調べていくと、ハイナッツの活動は言語学研究に限らず、それ以外の領域にも及んでいたことがわかる。ではなぜハイナッツの名はほとんど知られることなく、歴史の影に隠れてしまったのだろうか。これを18世紀の時代背景と関連付けて考えてみたい。

第一に考えられるのはハイナッツの教育者としての立場である。ハイナッツの掲げた汎愛主義に基づく教育理念は評価の聲が上がる一方で、まだ当時、目新しい思想であった新人文主義は批判の対象にもなった。すなわち、反新人文主義者らは「汎愛主義教育は高等教育に有害な原理を導入しているとみなし、汎愛主義者は有益なものが神聖で、平凡で単純なものが真実であり、共通するものこそが分かりやすいと考える人々として軽蔑した」(Günther 1999:50, Paulsen 1921:51)²⁸。その結果、「この批判が18世紀の後半から認められ、ハイナッツのような教育者の人生と著作はほとんど忘れられてしまった」(Ebd.:50)²⁹と言われる。

そしてこれは第二に、ハイナッツの文法家としての立場とも深く関係するだろう。当時の標準文章語は、17世紀に「言語的複合性が社会的身分の高さの証」(高田・新田 2013:228)³⁰と知識人らが捉えたことで、その「高尚なドイツ語が標準文章語として確立されて」(Ebd.:228)いった。ゆえに、「日常の話しことばは崩れたことばと見なされ低く評価された」(Ebd.:228)。したがって、この流れを受けた18世紀の文章語における標準ドイツ語論争も高尚なドイツ語を扱える知識人らによって、理想的な言語規範に関する議論が中心と

なった。ようやく 18 世紀末頃には、日常の話しことばに注目する文法家も登場するものの³¹、やはり知識人による知識人のための言語規範であることに変わりはない。これに対し、ハイナッツは学校での言語教育に重点を置いた文典を作成した。つまり、知識人に向けてではなく、学生という一般市民に向けた「使用規範」を確立することを試みたわけである。そのため、ハイナッツの言語研究は理想規範としての標準ドイツ語の確立が目下の課題であった 18 世紀においてはあまり重要視されなかったのである。

そして第三に、ハイナッツと同時期にアーデルングがいたことも大きな要因だと言える。例えば、アーデルングの『プロイセン王国のためのドイツ語文法』*Deutsche Sprachlehre zum Gebrauche der Schulen in den Königlich Preußischen Landen* (1781) は「プロイセンの文部省の委託を受けて著した学校文法書」(佐藤 2017:35) であり、アーデルングの権威は北ドイツでも圧倒的であった。ゆえに、「ハイナッツの著書はその立場の強さでは同時代のアーデルングの業績には及ばないが、一部では知られていた」(ADB 1880:374) と記述されている。このようにハイナッツを取り巻く環境を見ていくと、18 世紀はハイナッツにとっては不遇な時代であったとしか言いようがないのである。

しかし、そんなアーデルングでさえ、「本来、ドイツ語の単語において音はほとんどすべての場合にそれを表記する必要がないほど、容易で（綴りと）一致したルールに従っているのだ」(Adelung 1793:v)³² とし、ゴットシェートも「もちろん話し言葉は規範とはなりえないので、「最良の作家」の作品の助けを借りなければならないのだ」(Ernst 2012:186)³³ と、発音規範自体を副次的な問題として捉えている。ではなぜ、このような時代の中でハイナッツは正書法研究と同等に正音法研究にも目を向けることができたのであろうか。そして、その研究はどのようなものであったのか。次章にて具体的に見ていく。

第 2 章 正音法分析

2-1 ハイナッツによる標準ドイツ語の規範概念

ハイナッツは「生粋のドイツ人は良いドイツ語 *gutes Deutsch* を話し、書くことに励まなければならない」(Heynatz 1785:1)³⁴。と述べ、文章語と話し言葉のそれぞれに「良いドイツ語」が必要だと説いた。そして、ハイナッツは良いドイツ語を構成するために必要な 4 つの要素を具体的に説明しているので、これを概観するために筆者が要点のみをまとめ、表 2 とした。

表 2：ハイナッツの良いドイツ語の概念³⁵

①訛りのないドイツ語 reines Deutsch	「人々はすべての優秀なドイツ人によって使用され、承認されている言葉を使用しなければならない」 ³⁶
②的確なドイツ語 genaues Deutsch	「人々は何かを言おうとする時、まさにそれで、それ以外に言いようのない言葉を使わなければならない」 ³⁷
③適切なドイツ語 richtiges Deutsch	「人々は[中略]言葉をつながりの中に置いていくので、正しい順番に並べなければならないし、いつも求められる正しい語尾変化が必要とされる」 ³⁸ 。
④美しいドイツ語 schönes Deutsch	「選り抜かれた言葉と話し方、巧みな言い回し、響きの良い表現とつながりが必要と[中略]されなければならない」 ³⁹

そして、ハイナッツはこの4つの構成要素が良いドイツ語を生み出すのであると同時に、対立概念として「悪いドイツ語 schlechtes Deutsch」(Ebd.:2f.)も存在するとして、それぞれを①'訛ったあるいは野蛮なドイツ語 unreines oder barbarisches Deutsch ②'不正確あるいは不的確なドイツ語 unbestimmtes oder ungenaues Deutsch ③'不適切なドイツ語 unrichtiges Deutsch ④'単に誤りがないだけのドイツ語 bloß fehlerfreies Deutsch と述べた。⁴⁰ この4つの要素をそれぞれ見ていくと、①と①'がハイナッツの標準ドイツ語の概念と関連している要素に相当する。なぜなら、ハイナッツは①'訛ったあるいは野蛮なドイツ語の説明として、

時折幾らかのドイツ人によって、部分的には一つの地域全体で使用されている言葉や話し方ではあるが、人々が他のドイツの地域出身の者と話す際には使用されるはならない言葉や話し方とここでは理解される。(Ebd.:2)

と述べているのである。つまり、ハイナッツには方言レベルのドイツ語と、地域間の差異がなく、異郷の者同士が相互理解可能であるという意味での超地域的なレベルのドイツ語との間に明確な区別がある。これを裏付けるように、ハイナッツは「人々が常々、ドイツ語の方言と呼ぶものは基本的には標準ドイツ語の下位変種以外の何でもない」(Ebd.:6)と断言している。1-2 で述べたような、18世紀当時の文法家らの多くが脱却できていなかった方言と標準語の捉え方とは異なり、標準発音は方言の上位に超地域的共通語として定められるべきという認識がハイナッツにはあったのである。さらにハイナッツは当時の北ドイツの言語状況を踏まえて、

ドイツ語の二大方言とは高地ドイツ語 Hochdeutsch と低地ドイツ語 Plattdeutsch⁴¹ である。後者は現在、書き言葉においては極めて稀にしか使われず、ほとんどただ冗談で用いるだけである。しかし低地ドイツ語 Plattdeutsch は、ウェストファーレン、低地ザクセン、上部ザクセンの北半分、プロイセン、クアラント、リーフラントやシュレスヴィヒでは頻繁に話されている。特に村や小都市では多くの人が、とりわけごく普通の人が、高地ドイツ語と呼ぶものを全然理解しなかったり、全く不完全なものだと思っている。それにもかかわらず、低地ドイツ語 Plattdeutsch は卑しい身分の人たちの間ですらますます高地ドイツ語によって排除されているのだ。(Ebd.:4f.)⁴²

ここで訳は低地ドイツ語と対比させるために Hochdeutsch を高地ドイツ語としたが、つまり、ハイナッツは北ドイツでは話し言葉のレベルで標準ドイツ語 Hochdeutsch がかなり広範囲にわたり普及していることを観察している。確かに 18 世紀末には「教養層において標準文章語が十二分に普及し、この階層では公的場面ではできる限り標準文章語に近い話し方をするのが好ましいという意識が生まれていた」(高田・新田 2013:232)。というわけであるから、綴られている通りに発音することが望ましいとされたわけである。しかし、高田・新田(2013)が上記に示した規範意識と比較すると、ハイナッツは書き言葉と話し言葉との関係性について少し異なった見解を提示する。

上部ドイツ語の方言は時折、シュヴァーベン方言とも言うし、低地ドイツ語 Niederdeutsch の方言のことはザクセン方言ともいう。この両方から書き言葉あるいは文語が成り立っていて、それらはまた全ての知識人や、ドイツ語圏の全地域の聡明な人々によって話されるべきであるのだが、ほとんど話されず、未だ区別されている。幾らかの人々により標準ドイツ語と間違っ混同されているこの文章ドイツ語は、完璧なドイツ語の指導のための優れた対象である。では、[中略]どの言葉が文章ドイツ語から排除されるべきで、どれがそうでないのか？
(Heynatz 1785:6)

この説明から、ハイナッツは文章語においては上部ドイツ語と低地ドイツ語 Niederdeutsch が混ざり合っ、標準文章語が成立していると認めている一方で、話し言葉については標準文章語の通りには発音されていないと主張しているのである。したがって、ハイナッツがこ

ここで述べている標準ドイツ語の概念から、ハイナッツが標準発音の規範の重要性を提唱しようとしていることがわかる。

前章で述べた通り、18世紀当時は北ドイツの言語的地位は低く、文章語においては早くから低地ドイツ語が定着していた。この状況をハイナッツは「文章語の北ドイツの性質をもっぱら歴史的に説明する」(Jellinek 1913:294) ことで北ドイツの言語的劣勢に対して齒がゆさをにじませている。

新鋭の良い作家たちの元でシュヴァーベンまたはチロルで書かれていたら、書籍の言葉の中にはよりシュヴァーベン方言やチロル訛りがもっと多く含まれていただろう。今となつては、他の地域が来るには遅すぎた。すなわち、たとえそれらの地域が是とする理由があるにせよ、我々はそれらに従うわけにはいかない。
(Ebd.:294, Heynatz 1775:21)⁴³

確かに、「文化的な中心も 1760 年頃にはすでに、上部ザクセンのライプチヒとドレーセンから北ドイツのベルリンへ移っていた」(高田・新田 2013:232) ため、18世紀は実際のところ、プロイセン王国の強大化によって北ドイツの地位そのものは徐々に高まっていた。その後も着実に勢力を拡大していき、特に首都ベルリンでは「19世紀初頭は巨大な人口爆発と大都市ベルリンの形成に至った。つまり毎日、何千もの労働力がベルリンへ流れ、そこで見出された都市言語は、初期の都市言語の特徴的な事典上の形を含んでいる」(Bernier 2009:125)⁴⁴と、あらゆる地域出身者がベルリンに集結したことで、各地域の方言が中和され、ベルリンの話し言葉は都市言語 *Stadtsprache* という標準変種 *Standardvarietät* の一つとして、受け入れられるようになっていくのである。つまりハイナッツは 18世紀末から徐々にベルリンの言語が変化を遂げていく過渡期を目の当たりにし、おそらく標準文章語と実際の話し言葉との間に乖離が生まれていることに気がついたのであろう。そして、大都市として成長するベルリンで、より多くの方言を日頃から耳にすることができたからこそ、ハイナッツは正音法研究に着目することができたのだ。

したがって、ハイナッツはすでに北ドイツで受け入れられていた標準文章語から発音規範を導き出すことを避け、標準文章語と同等に標準発音の規範を新たに見出すために発音観察を行い、より客観的な立場から標準ドイツ語を見出そうとしたのである。

2-2. ハイナッツの正音法

ハイナッツの文典⁴⁵は正音法 *Rechtsprechung/Orthoepie* を筆頭に、正書法 *Rechtschreibung/Orthographie*、語の研究あるいは語源学 *Etymologie*、語の接合あるいは統語論 *Syntax*、韻律論 *Prosodie* の全 5 章から構成されている。その中でも正音法は第 1 章に位置付けられ、全 85 項目の正音法に関する法則が記されている。まず、その冒頭部分でハイナッツの正音法に対する規範が説明される。

正音法は本来正しく書かれたものを正しく発音することだけを教示するものである。しかし、間違っ書かれていても正しく発音しなければならない、そうすることで人は思考の中で正書法の改善を行うわけである。例えば *beßer* と書かれているのを見ても、人はそれでも *besser* と発音する。同様に *Cöln* は *Köln* と発音するし、*hieng* は *hing*、*schuff* は *schuf*、*Ewer* あるいは *Ewr* は *Euer* のように発音する (Heynatz 1803: 2)。⁴⁶

日常生活レベルの発音はドイツのどの地方をもってしても全く正しいものではなく、たとえマイセン地方の発音とブランデンブルク地方の発音が最良の発音である権利を持つと思っていたとしても、両者は今もなお、正音法として教えられなければならない本当の標準ドイツ語発音とは多くの部分において相違している (Ebd.: 2)。⁴⁷

すなわち、ハイナッツにとって正音法にしたがって正しい発音を学ぶことは、文章語も相互作用的に改善されるという意図もあった。さらに正音法はどの方言にも依存しない独立した発音規則であるということもここでも示している。しかしながら、当時は国家という概念がないため、ハイナッツも、「ブランデンブルク方言の支持者」(Scharloth 2005: 213)⁴⁸ というように北ドイツ派として地方の文法家に分類されてしまうが、だからと言ってゴットシェートとアーデルングのように自身の故郷の言葉を優位な言語として支持した地方の文法家とは、そのハイナッツの標準ドイツ語の概念に基づき区別されたいところである。それゆえ、ハイナッツは書簡の中で、「ブランデンブルク人はよく間違っ話し方をする。これは私が決して否定しない、むしろ一層否定する必要のない真実である。だから私は自身の正音法にブランデンブルク人の大半の誤用を率直に示し、それについて警告した。」(Heynatz 1771:14)⁴⁹ と自身の出身地域にも発音の誤用があることを認め、より客観的な視点から正音法を分析する姿勢を見せた。このハイナッツの発音観察における研究姿勢は後に、「ゴッ

トシェートとアーデルング間の年代の中で最良の北部ドイツ語文法である、彼の文典の功績はその文法理論ではなく、その観察の中にある」(Jellinek 1913:235)⁵⁰。という評価がされた。

正音法の規則を記述するにあたってハイナッツはまず、ドイツ語の綴りを 9 個の母音 Selbstlauter/Vokale と 26 個の子音 Mitlauter/Konsonanten に分け、それぞれ母音について 37 項目、子音について 41 項目に及ぶ発音規則を記述した。⁵¹ 以下、ハイナッツによるその母音と子音の分類をまとめたものが表 3 である。

表 3：ハイナッツによる母音と子音の分類

つづり	母音 Selbstlauter	a, ä, e, i, o, ö, u, ü, y
	子音 Mitlauter	b, c, ch, d, f, g, h, j, k, l, m, n, p, ph, q, r, rh, s, ß, sch, t, th, v, w, x, z

以上のことを前提として、母音と子音それぞれの規則について分析していく。

2-3. 母音（単母音、二重母音、ウムラウト）

まずハイナッツは「すべての母音は長くあるいは短く（鋭く）発音される」(Heynatz 1803: 7) と述べている。その中でもハイナッツは、表 4 が示しているとおり、母音が長音として発音される際の 3 つの大原則を定めた。⁵² この表で例示されている語彙において原則が働いている母音に関しては筆者が下線を引いて強調しているので参照されたい。

表 4：長母音の 3 原則

第 1 原則
h あるいは th と同一の音節内にある母音は長母音となる。(z.B. n <u>ä</u> hrhaft, w <u>ä</u> hr, s <u>e</u> hr, k <u>o</u> hlschwarz, <u>i</u> hr, m <u>ä</u> hren, gew <u>ö</u> hnt, Gew <u>ü</u> hl, <u>U</u> hr, R <u>a</u> th, Th <u>a</u> t, Th <u>u</u> n, Th <u>o</u> r)
第 2 原則
ある語中の母音が長母音である場合、語形に変化があっても母音は長母音として発音される。(z.B. Pf <u>a</u> d-Pf <u>a</u> de, k <u>a</u> m-k <u>a</u> men, sch <u>w</u> er-sch <u>w</u> erer, Klein <u>o</u> d-Klein <u>o</u> de, sch <u>o</u> b-sch <u>o</u> ben, tru <u>g</u> -tru <u>g</u> en)
第 3 原則
語中で一度長く発音された母音は活用・語尾変化 (Zusammenziehung) あるいは派生語の場合にも長音のままである。(z.B. 活用・語尾変化: kl <u>a</u> get-kl <u>a</u> gt, lob <u>e</u> t-

lobt, rufet-ruft, übet-übt, 派生語: haben-H^ubselichkeit, klagen-Kl^uaglieder, je-
der-jedweder, schwer-schwerlich, geloben-gelübde, laben-Labsal

現代の語感からすると、単数形と複数形や動詞の活用形の語幹の発音が保持されることは当然のこととして受け止められるが、これを発音規則として提唱したこと自体が当時では非常に革新的であったといえよう。さらに、この原則に当てはまらない長母音についても、5つのパターンに分けてハイナッツは例示している。⁵³ その5パターンを表5にまとめ、該当する長母音には下線を引いた。

表5：3原則に当てはまらない例外的な長母音の一覧

パターン1：単語一覧（ほとんどがrの前にくる母音である。）

Adler	Magd	erst	Färse	empor
Alfanzerei	Pabst/Papst	her	Märte	Mond
Art	Pan	Herd	wärts	Probst/Propst
Bart	Schwarte	Krebs	mir	vor
die Barsch	Unflat	Pferd	dir	wornach
Bratsche	zart	wer	wir	nur
bar	zwar	werth	Cherubim	zur
gar	Der/Dem/Den	Zibetkatze	Seraphim	nun
gram	er	Erz	Obst	Ur
Harz	Erde	Gebäude	Bord	für
Küchlein				

パターン2 接尾辞 -bar, -sam, -mal, -dar, -sal (z.B. zinsbar, langsam, zweimal, immerdar, Schausal)

パターン3 ラテン語<o>かフランス語の<on>に由来する語 (z.B. Religion, Baron, Garnion, Pardon, Sermon, Spion)

パターン4 名詞句の-al, -an, -ar, -at, -il, -it, -iz, -ot, -ur

Admiral	Korduan	Resultat	Profil	Patriot
Lineal	Saffran	Advokat	Debit	Zelot

Pok <u>a</u> l	Komment <u>a</u> r	Salat	Prof <u>i</u> t	Tabulat <u>u</u> r
Alt <u>a</u> n	Kommiss <u>a</u> r	Spinat	Just <u>i</u> z	Temperat <u>u</u> r

パターン 5) ギリシャ語あるいはラテン語由来の/et/ (z.B. Poet, Propet)

これに合わせて長母音の特徴を説明していく中で、ハイナッツは単母音の発音について「幾つかのドイツの方言では、とりわけ母音をあまりにも長く伸ばす」⁵⁴ (Ebd. :21)という誤用も指摘した。そして、方言的誤用として母音が長音のように長く発音されている単語を挙げた。筆者がこれをまとめて表 6 とし、誤用に該当する母音に下線を引いたので、参照されたい。

表 6：長母音が誤用される単語例一覧

<u>a</u> b	w <u>a</u> rten	D <u>a</u> niel	B <u>o</u> rten	B <u>e</u> hemoth
<u>a</u> n ⁵⁵	w <u>a</u> s	B <u>e</u> thlehem	d <u>o</u> rt	W <u>o</u> l ⁵⁶
<u>A</u> rzt	g <u>e</u> rn	J <u>e</u> rusalem	f <u>o</u> rt	f <u>o</u> rdern
G <u>a</u> rten	T <u>r</u> ester	Lazare <u>t</u> ⁵⁷	M <u>o</u> rd	W <u>a</u> rte
Gegen <u>w</u> art	V <u>e</u> rs	Elisab <u>e</u> th	H <u>o</u> rt	Gabriel
h <u>a</u> t	w <u>e</u> rden	b <u>i</u> st	P <u>o</u> rt	<u>Q</u> rt ⁵⁸
J <u>a</u> gd ⁵⁹	W <u>e</u> rder	<u>i</u> st	W <u>o</u> rt	Zeba <u>o</u> th
K <u>a</u> rte	w <u>e</u> rth	b <u>i</u> n	D <u>a</u> mon	
M <u>a</u> ngold	Israel	w <u>i</u> rd	<u>O</u> rgon	

以上のように、ハイナッツは母音の長音と短音の特徴に関する説明をすべての母音の共通事項として示した。次にこれを踏まえながら単母音、二重母音、ウムラウトの発音のそれぞれの発音規則について見ていく。

単母音

まずそれぞれの単母音の特徴についてであるが、とりわけハイナッツは<e>音についての分析を詳細に行っているので、まずは<e>音についての分析を行う。これは、「ハイナッツは5つの e 音即ち3つの長音と2つの短音を区別しているだけでなく、共通の規則が十分でない場合に限り、開音の e あるいは閉音の e を持つ単語の一覧も示している」(Jellinek

1914:18)⁶⁰ とイエリネク(1914)も特筆したように、ハイナッツは〈e〉音の発音を単に長音と短音に分けただけではなく、5つの音に分類したのである。これについては表6においてその分類表を示した。

表7：〈e〉音の分類表

長音の 〈e〉 (das lange e)			短音の 〈e〉 (das kurze e)	
(1)scharf/geschlossen	(2)offen	(3)sehr offen	(1)offen ⁶¹	(2)scharf ⁶²
Base <u>e</u>	le <u>b</u> t	sch <u>e</u> ren	st <u>e</u> rbt	de <u>n</u> n
Lie <u>b</u> e		bes <u>e</u> ren	l <u>e</u> rn	Ath <u>e</u> m
		Sch <u>e</u> rdt		blas <u>e</u> n
		<u>E</u> rdwurm		schre <u>e</u> cken
		<u>E</u> rde		schn <u>e</u> ll
		sch <u>e</u> rw <u>e</u> r		ho <u>e</u> t
				<u>e</u> s
				F <u>e</u> ld
				K <u>e</u> necht

そして、これらの5つの音の特徴に関する説明は表8にまとめたとおりである。⁶³ ハイナッツは主に開音 *offen*、閉音 *geschlossen* という表現を用いて〈e〉音の性質を説明しているのであるが、この分類の仕方は現代における国際音声記号 IPA の表記の仕方とは異なっているため、その点に関しては注意を払う必要がある。例えば、ハイナッツは長音の鋭いまたは閉音 *scharf oder geschlossen* の〈e〉について、「早く、そして飛ばして発音されるにすぎない最後」(Heynatz 1803:10)⁶⁴、すなわち語尾の〈e〉の発音を指している。例に挙げられた単語の発音では〈e〉の発話時の口の開きは小さくなる。逆に、開音 *offen* と分類された語の〈e〉の発話時には口の開きが大きくなる。つまりハイナッツは長母音と短母音をそれぞれ分けた上で、口腔の開口度を基準に〈e〉音を細分化したと推測できる。

表8：5つの〈e〉音の特徴

長音	(1) 鋭いまたは閉音の <i>scharf oder geschlossen</i> 〈e〉：本来の自然な〈e〉の音が保持される時。
	(2) 開音の <i>offen</i> 〈e〉：〈a〉に近く、〈ä〉の発音のように聞こえる音。

	(3) さらに開音の sehr offen <e> : r の前に来た時に発音される音。
短音	(4) 開音の offen <e> : r の前に来るときに発音される音。
	(5) 鋭い scharf <e> : それ以外の場合。

さらに、長音の (2) に該当する <e> 音を持つ単語については別途その単語の語尾ごとに分けて一覧として分類した (Ebd. : 17ff.)。その分類表を表 9 にまとめ、長音の <e> には下線を引いたので参照されたい。ここではより多くの語彙を一覧として提示し、学習者になるべく覚えやすい方法で教示しようとするハイナッツの教育者としての配慮もうかがえる。

表 9 : 長音で開音 (offen) になる <e> 音を語の語尾によって分類した表

[ebe]	Rebe, Rubebe, Pfebe, Zibebe
[ebel]	Hebel, Knebel, Nebel, Sebel(Säbel), Feldwebel
[ebs]	Kebsweib, Krebs
[ebst]	nebst
[ede, eden]	reden, Rede, redlich, Redner, beredt, edel, Schedel, Wedel, veredeln, wedeln
[eder]	Feder, Fledermaus, Flederwisch, Leder, weder, jedweder
[edig]	Ledig, ruhmredig (ruhmräthig)
[edigr, edigen]	Predigt, predigen
[efel]	Frefel (Frevel), Schwefel
[efen]	Hefen
[efer]	Kefer (Käfer)
[efig]	Kefig (Käfich)
[eg]	Steg, Weg, Ege, egen, Degen, fegen, gegen, begegnen, hegen, legen, pflegen, rege, regen, Regen, regnen, Segen, bewegen, erwegen, Gegend
[eger]	Pfleger
[egern]	wegern (weigern)
[ehe, ehen, eher]	behen (bähen), drehen, flehen, Heher (Häher), krehen (krähen), nehen (nähen), Schweher (Schwäher), wehen, zehe (zähe), zehen, zehn, sehen, Sehe, geschehen
[eken]	blocken (blöcken oder blecken)
[el, elen, eler]	schelen, Bescheler ⁶⁵ , elend, Elend
[elig]	selig, mühselig
[em]	bequem, dem, wem, schrem ⁶⁶
[eme]	Breme (Bräme)
[emel]	Schemel
[emen]	Schemen, Bremen
[emlich]	nemlich (nämlich)
[en, enen]	Den, denen
[ese, esem, esen]	Lese, Besem (Besen), genesen, gewesen, lesen, Wesen, verwesen

[eser]	Ver <u>w</u> eser, <u>W</u> eser
[et, ete, eren, eter, etig, ets]	<u>b</u> eten, Geb <u>e</u> t, kn <u>e</u> ten (knäten), st <u>e</u> te, st <u>e</u> tig, st <u>e</u> ts, tr <u>e</u> ten
[evel]	<u>F</u> re <u>v</u> el
[ezel]	<u>P</u> ret <u>z</u> el

注) Heynatz が正しい綴りとして注釈を付け加えた語については () で示した。

さらにハイナッツは<e>音に関連して、長母音の第1原則である h あるいは th と同一の音節内にある母音は長母音となるという規則に従うと、eh の綴りを持つ一部の単語は、長音で開音の offen <e>と同じ発音になると記述した (Ebd.:20)。ハイナッツはこれを表 9 と同様に語の語尾によって分類した。以下、筆者が表 10 としてこれをまとめ、該当部分には下線を引いている。

表 10：長音で開音 (offen)の <e> 音である eh で綴られる語を分類した表

[ehde]	<u>F</u> ehde
[ehl, ehle, ehlen]	<u>f</u> ehl, <u>b</u> ef <u>e</u> hlen, <u>f</u> eh <u>l</u> en, <u>h</u> eh <u>l</u> en, <u>R</u> eh <u>l</u> e, <u>a</u> us <u>k</u> eh <u>l</u> en, <u>M</u> eh <u>l</u> , <u>Q</u> ue <u>h</u> le, <u>s</u> te <u>h</u> en
[ehm, ehmen]	<u>F</u> eh <u>m</u> , <u>n</u> eh <u>m</u> en, <u>g</u> ene <u>h</u> m, <u>a</u> ngene <u>h</u> m, <u>v</u> orne <u>h</u> mlich, <u>L</u> eh <u>m</u> , <u>l</u> eh <u>m</u> en, <u>l</u> eh <u>m</u> ern
[ehne, ehnen]	<u>d</u> eh <u>n</u> en, <u>l</u> eh <u>n</u> en, <u>S</u> eh <u>n</u> e, <u>s</u> eh <u>n</u> en

そして、ハイナッツが<e>音以外の単母音に関して示した発音規則をまとめたものが表 11 である (Ebd.:23)。母音の規則が該当する部分には下線を引いている。ハイナッツは<y>も単母音として認識しているが、その音は<i>と一致していて、<i>と同様の発音規則を持つとしたため、表 11 においては<i>と<y>は同じ枠組みとして捉えた。

表 11：単母音<a>,<i>,<y>,<u>,<o>の発音における注意点

das <a>	長音の<a>は<ä>でも (z.B. 正： <u>A</u> men 誤： <u>Ä</u> men)、<o>あるいはほとんど<oa>のようにも発音してはならない (z.B. 正：V <u>a</u> ter, j <u>a</u> , g <u>a</u> r, <u>a</u> n, s <u>a</u> gen 誤：V <u>o</u> ter/V <u>o</u> ater, j <u>o</u> /j <u>o</u> a, g <u>o</u> h <u>r</u> /g <u>o</u> ar, <u>o</u> h <u>n</u> / <u>o</u> ah <u>n</u> , s <u>o</u> g <u>e</u> n/ <u>so</u> agen)。
	短音の<a>は鋭い<e>にも、開音の<e>にも発音してはならない (z.B. 正：Eck <u>a</u> rt, man <u>a</u> cher 誤：Eck <u>e</u> rt, men <u>e</u> cher)。
>/<y> das <i>	短音の<i>は<ü>のように聞こえてはならない (正：W <u>i</u> rth/w <u>i</u> rd, w <u>i</u> rklich 誤：w <u>ü</u> rt, w <u>ü</u> rklich)。そして、<e>のようにも聞こえてはならない

	(正 : bringen, wirklich 誤 : bre <u>n</u> gen, we <u>r</u> klich)。
	長音も短音の<y>もともに完全に<i>の音に聞こえる。そして、それを<ü>のように聞こえさせる必要は全くない。
das<u>	長音の<u>は<oh>でもなく、また<au>のようにも発音されてはならない。
	短音の<u>は<o>のように発音してはならない (正 : ku <u>r</u> z 誤 : ko <u>r</u> z)。
das<o>	長音の<o>は長音で暗い<a>の音でも<au>の音にも発音されてはならない (正 : lo <u>b</u> en, Mo <u>d</u> e 誤 : lo <u>a</u> ben, Ma <u>u</u> de)。
	短音の<o>は<a>の音でもなく<u>の音にも発音されてはならない。

二重母音

ハイナッツは二重母音を Doppellauter あるいは Diphthonge と表し、2つの母音を一緒にあるいは一つの分節内で発音するとき生じる音であると定義した。したがって、本来ドイツ語には<ai>(<ay>), <au>, <äu>, <ei>(<ey>), <eu>, <oi>(<oy>)の6つの二重母音しかなく、例として Kaiser, Hayen, Haut, Häute, Leiden, befreyen, Reuter, Boizenburg (地名), Hoym (地名) を挙げた。⁶⁷ そして、「ほとんどが ä, ö, ü を二重母音として数え、それを ae, oe, ue または ui と呼ぶが、全くの間違いだ」(Ebd. :6) ⁶⁸ 。と説明し、二重母音とウムラウトの区別も発音規則の中で明確に示した。加えて、「二重母音は常に長くあるいは伸ばして発音される。対して単母音は時には伸ばして、特には短くあるいは鋭く発音される」(Ebd. :7) ⁶⁹ と説明し、単母音との発音の特徴における違いも示した。その他にハイナッツは二重母音に関して、9つの注釈を加え、その中で発音の誤用などを詳細に記述した。これをまとめたものを表 12 に示す。誤用等が反映されている部分には下線を引いている。

表 12 : 二重母音に関する注釈⁷⁰

注 1	<eu>と<äu>はほとんど同じ発音である。しかし両方とも<ei>, <oi>とは正確に区別されるべきである。(z.B. <u>lä</u> uten: <u>Le</u> uten: <u>lei</u> ten, <u>Be</u> izenburg: <u>Be</u> uzenburg: <u>Bo</u> izenburg)
注 2	<ei>と<ai>は発音において十分に区別されるべきである。両方とも一定の人には全く<ai>のように発音されるにも関わらず、他の人には全く<ei>と発音されている。(z.B. <u>We</u> ise/ <u>Wa</u> ise, <u>Se</u> ite/ <u>Sa</u> ite) 間違った発音は<ai>を<a>に、<ei>を<ee>に変えてしまう。だから <u>Gro</u> ß <u>h</u> ayn から <u>Gro</u> ß <u>h</u> ahn、 <u>me</u> inen から <u>me</u> enen、 <u>e</u> ins から <u>e</u> ens

	と不正確に発音する。
注 3	<au>はいくかの単語中で<o>のように発音され、他の単語中では<u>のように発音される。(z.B. 正 : Rauch, auf 誤 : Rooch, uff) したがって<äu>はしばしば<öh>のように発音される。 (z.B. 正 : räuchern, Bäume 誤 : röhchern, Böhme)
注 4	どれほど多くの人が未だに Vogt の代わりに書いているだろうか、Voigt という単語においては<oi>が長音の<o>のように発音される。Hoya は Hoj-ja のように、Boy は Boji のように、boyen は boj-jen あるいは bojen のように聞こえる。
注 5	人々が<ou>の音だと思っている<ow>を幾人かは<au>より暗い響きで発音し、他は<o>のように発音する。(z.B. Bandow, Scharrow, Lemgow)
注 6	発音において<äu>, <eu>と区別されていない äü と eü は大抵、正しく書くことできない人々によってのみ使用されている。
注 7	äy または äi (他の人は単なる ai にしているところの) を未だ使用している者は (z.B. Käyser, Käiser) それを<ai>ではなく、<ei>のように発音しなければならない。öy は、存在するのであれば、完全に<oi>に聞こえる。(z.B. Höym=Hoym)
注 8	ui または uy は<uij>のように聞こえる。(z.B. hui, pfui) Duisburg は Dühsburg と発音されている。
注 9	昔の人は付け足しの e を用いて母音を長くするという慣習があった。そこから人々は ae, oe, ue が未だ時折、長音の<a>, <o>, <u>だと思っている。特にウェストファーレンの固有名詞において (z.B. Baexen, Vaerst, Soest, Roesfeld, Hueth, Behuef など)。今では<e>の良い発音は<ae>, <oe>, <ue>同様、<ie>の発音ではほとんど聴くことがないので、<ie>も二重母音ではなく、単なる長い<i>と思っている。

以上の注釈の中からいくつか考察を加えると、まず注 2 の<ai>と<ei>の発音の区別に関して、ハイナッツは書簡の中で、

<ei>を<ai>と発音することに関しては、ほとんど全てのザクセン人がひどい有様だ。[中略] Ei と彼らが言う時、それはそのままの e で<ä>のように聞こえる。(つまり、私が文典の中で開音 offene の<e>とする e の音だ。)[中略] ザクセン人は

往々にしてこのような<ei>を<ai>の発音の癖のせいで正しく発音することができないのである。(Heynatz 1771:15)⁷¹

とハイナッツはザクセン方言の誤用を例に出すことで、ei の綴りを持ち、<ai>と発音すべき単語では<a>の発音について、今日では[a]と[e]の中間音に位置する、/ɛ/という音素を持つ<ä>の発音と混同してはならないと述べていると解釈ができる。

これについてはゴットシェートの文法書を音声学的に分析したペンツル Penzl(1977)も、類似した見解を示している。ゴットシェートは a-または au-の語系の派生語と見なすと、ä または äü と書きあらかず傾向があると指摘し、ゴットシェート(1762)から現代の使用規範と食い違う正書法の例を挙げている。(表 13) そしてこの指摘を通して、ペンツル(1977)もまたゴットシェートが/e/と/ɛ/を発音においても混同させていたのではないかと類推している。

72

表 13：ゴットシェートの ä の書記法

ゴットシェートの書記法 ⁷³	現代の書記法 ⁷⁴
<u>A</u> eltern, <u>ä</u> msig, <u>A</u> ente, <u>A</u> ernte, <u>B</u> ächer, <u>Br</u> ämse, <u>Gr</u> änzen, <u>H</u> äcken, <u>H</u> äller, <u>K</u> ärker, <u>K</u> ätzer, auszum <u>är</u> zen, m <u>ät</u> zeln, s <u>ä</u> ßhaft, schl <u>ä</u> mmern, St <u>ä</u> mpel, V <u>ä</u> tter, Gr <u>ä</u> uel, h <u>ä</u> ucheln, m <u>ä</u> ucheln, l <u>ä</u> ugnen, pl <u>ä</u> rrerren	<u>E</u> ltern, <u>e</u> msig, <u>E</u> nte, <u>E</u> rnste, <u>B</u> echer, <u>B</u> remse, <u>G</u> renze, <u>H</u> ecken, <u>H</u> eller, <u>K</u> erker, <u>K</u> etzer, auszum <u>e</u> lzen, m <u>e</u> tzeln, s <u>e</u> sshaft, sch <u>e</u> lmmen, St <u>e</u> mpel, V <u>e</u> tter, Gr <u>e</u> uel, h <u>e</u> ucheln, m <u>e</u> ucheln, l <u>e</u> ugnen, pl <u>e</u> rrerren

さらに注 6 と 7 についてであるが、ハイナッツはドイツ語には三重母音 Dreilauter/Triphthongen が存在しないとした上で、もし ä と ö が二重母音であるならば、äu, äi または äy そして öy は三重母音なるだろう。⁷⁵ と矛盾が生じることを指摘していることから次に述べるウムラウトと二重母音との区別を明らかにしようとした。

ウムラウト

ドイツでは 18 世紀以前からウムラウトは二重母音なのか否かということが議論されてきた。これは、ラテン語の文法理論では æ と œ という形で印刷された ae と oe が二重母音として扱われたように、ウムラウトが正書法あるいは語源学に大きな影響を受けてきたことに起因する。長い議論の末、ウムラウトが二重母音ではなく独立した母音体系だと認められ

るようになったのは18世紀の後半であった。⁷⁶ ハイナッツもウムラウトは二重母音ではないとする立場であったので、

印刷物ではしかし、Ä, Ö, Ü の代わりに、一般的に Ae, Oe, Ue が見受けられるが、それはまた付け足しの e により長くなった a, o, u とは十分に区別されるべきだ。しかし、小文字においては ä, ö, ü はほぼ一貫して ae, oe, ue だと思われている。[中略] ä, ö, ü を特別な名前を用いて、残りの母音と区別するために、それらを濁った母音 unreine Vokal と名付けることができよう。これに反して、ä, ö, ü から切り離れた a, o, u を純粋な母音 reine Vokal と呼ぶことができる。この濁った母音への純粋母音の変化を人はウムラウトと呼ぶわけである。(Heynatz 1803:6)

77

というように印刷上のウムラウトの表記法によって、母音が2つ並ぶとあたかも二重母音のように見えるが、ハイナッツは ae, oe, ue は単に e が付け足されただけの長音の音を構成するにすぎず、二重母音の定義にも当てはまらなると記述した。ハイナッツが正音法の観点から、単母音とそれぞれの中間音に位置するウムラウトの音の存在を聞き分けられたからこそ、表記法に惑わされずに母音体系の細分化された分類ができたのであろう。表14はハイナッツが示したウムラウトの発音規則をまとめたものであり、該当部分には下線を引いているので参照されたい。

表14：ウムラウトの発音規則⁷⁸

<ä> <ö>	長音の<ä>はドイツ語の単語では r の前でさらに開音 <i>sehr offen</i> となる。(z.B. <i>währen</i>) その他のすべての場合は<ä>は開音 <i>offen</i> である。(z.B. <i>wähnen</i>) 外来語の場合は一般的に、その<ä>を鋭い <i>scharfes<e></i> のように発音する。(z.B. <i>Cesar</i> のように <i>Cäsar</i> を発音し、 <i>Thebe</i> のように <i>Thebä</i> を、 <i>Dieht</i> のように <i>Diät</i> を。その他 <i>Mejestät</i> , <i>Autorität</i> , <i>Naivetät</i> など。)
	短音の<ä>は常に全く完全に<e>の音のように聞こえる。(z.B. <i>ändern</i> のように <i>ändern</i> と発音する。) 短音の鋭い <i>scharfes<ä></i> は<i>でも<ö>の発音でもない。また短音の開音の<ä>は長音の<a>のように発音してはならない。
<ö>	長音の<ö>は<ä>にも<äö>のようにも発音してはならない。(z.B. 正： <i>König</i> 誤： <i>Känig</i> , <i>Käönig</i>)

	短音の<ö>は<e>のように発音してはならない。(z.B. 正： <u>ö</u> ffen 誤： <u>e</u> fnen)
das<ü>	長音の<ü>は<ie>のような発音をしてはならない。(z.B. 正： <u>ü</u> ben 誤： <u>i</u> eben)
	短音の<ü>は<i>のように発音してはならない。(正： <u>bü</u> ndig 誤： <u>b</u> indig)

ここで、アーデルングの発音に関する記述とハイナッツの母音の発音規則と比較してみたい。アーデルングは先述したように、正音法を副次的問題として捉えていた。しかしながら、アーデルングは辞書の第2版を改訂するにあたって、母音に関して3つの発音規則について記述している。これをまとめたのが表15である。

表15：アーデルングの母音の発音規則⁷⁹

開音の offenes< ê >	深い tiefes <e>の発音 (z.B. <u>l</u> esen, Best <u>e</u> chlich, B <u>e</u> tt <u>e</u> cke, Deich <u>m</u> esser, D <u>e</u> nk <u>w</u> ürdig, <u>E</u> nden)
長い音 gedehnter Ton	z.B. <u>Ä</u> rzt, B <u>ä</u> rt, B <u>ü</u> che, s <u>ü</u> chen など
鋭い音 geschärfter Ton	z.B. <u>l</u> ächen, m <u>a</u> chen, h <u>a</u> schen, br <u>e</u> chen, <u>A</u> n <u>s</u> chl <u>ü</u> ß など

アーデルングが記述したこの3種類の発音はその特徴から考察すると、母音の長短を示すものだったと推測ができる。しかしながら、この記述以外にアーデルングの記述の中に発音に関する記載はないことから、⁸⁰ ハイナッツの正音法と比べると非常に大まかな発音規則のみに留まっているという印象である。

2-4. 子音 (b/d/g vs p/t/k, r, -ig, -ch, sch, s/ss/ß)

ハイナッツは26個の子音については、<x>と<z>を二重子音とし⁸¹、残りの24個の子音のうち<l>, <m>, <n>, <r>を流音 flüssig に、<th>, <Rhi>を氣息の流音 aspirirten flüssigen に、そしてそれ以外の残りの子音を黙音 stumme というように分類した。今回の分析では、ハイナッツの子音に関する記述から有聲・無聲音に関する発音 (b/d/g vs p/t/k)、<r>音のバリエーション分析、語尾の<-ig>, <sch>そして<s>/<ss>/<ß>のそれぞれの発音規則を見ていく。

有聲音・無聲音 b/d/g vs p/t/k

ハイナッツは有聲音 b/d/g と無聲音 p/t/k(c)を説明する際に、表を記述している。それを原文通りに筆者が表16として作成した。(Heynatz 1803:27)

表 16：子音の分類一覧

Breite (Lenes)	Weiche (Mediae)	Harte (Tenues)	Aspirirte (Adspiratae)
w	b	p	ph, f und v
	d	t	th
j	g	k, c	ch

注) 今日の音声学的解釈では Breite/Lenes は(単数形)軟音、Harte/Tenues は(単数形)無声破裂音、Weiche/Mediae は Media (単数形)有声破裂音、Aspirirte/Adspiratae は氣息音を示すと推測できる。

ハイナッツはこの表において、黙音 *stumme* と分類した子音の中からさらに、緩い *Breite*, 柔らかい *weiche*, 硬い *harte*, 氣息 *aspirirte* の 4 つの発音的特徴に分類した。この表をよく観察していくと、有声破裂音 *b/d/g* と無声破裂音 *p/t/k* については、今日の音声学と一致する分類を行っているが、*[p b]* が両唇音、*[t d]* は歯茎音、*[k g]* が軟口蓋音であるということまでの記述はない。とはいえ、ハイナッツはこの有声音と無声音の関係性を非常に注意深く観察している。例えば、音節内の語尾が有声音 *b/d/g* で終わる場合、無声音 *p/t/k* の発音となることを発音規則として観察した。しかし、ハイナッツはこの規則に反する、ブランデンブルク地方と低地ザクセン地方の語尾の有声音の方言的誤用を取り上げ、例を挙げた。(例: *Krieg, Balg, Zwerg, Tag* について誤用されると *Kriech, Balch, Zwerch, Tach* となるが、本来は *Kriek, Balk, Zwerk, Taak* のように発音されるべき。)82

このように詳細に有声音と無声音の関係性を発音観察から導き出したハイナッツについて、

ハイナッツとメツケは両者とも有声音の子音体系が支配している地域の出身であり、彼らは軟音と硬音の関係性について一般的な認知に満足せず、どの場合に *b,d,g* が *p,t,k* のように聞こえるか、そしてどこでその 2 つの異なる音が一見すると同じ位置で有声音を保持するのかということを正確に述べている。

(Jellinek 1914:18)⁸³

というイエリネク(1914)の見解がある。ハイナッツもメツケも北ドイツ派に属した文法家である。つまりイエリネク(1914)は北ドイツ出身という両者の地域性が有声音と無声音の関係

性の分析につながったという考察をしたわけである。ハイナッツは有声音と無声音の語尾の発音における混同は、ブランデンブルクでも見られる誤用であるとしているが、この誤用は実際、ザクセン地方において非常によく見られる方言的誤用でもある。例えばハイナッツはザクセン地方特有の誤用例として praun(braun), Pauer(Bauer), Didel(Titel), Trache(Drache), bekleiten(begleiten), eindränken(eindrängen) などを挙げている。⁸⁴そして、ハイナッツは書簡においてもザクセン地域の発音の誤用を引き合いに出して以下のように述べている。

特に発話の間違ひに関しては当然触れなければならないことがある。生粋のザクセン人は、文法論争に巻き込まれて、彼が日常的な短い名前 (be, ce など) でスペルを言わなければならない時に、p と d、同様に t と d がいつも不明確に発話されているということである。[中略] 従って、若いマルク人の方がザクセン人よりも正確な耳を持っているということは自明の理ではないのか? (Heynatz 1771:16f.)⁸⁵

この点については、ペンツル(1977)が行ったゴットシェートの文法書の音声学的分析においても、「破裂音 (b/d/g, p/t/k) の混同が見受けられる。」(Penzl 1977:92) と指摘していることからハイナッツの指摘には現代の感覚とそれほど遠くない正確性があったのではないだろうか。

そして、表 15 には有声音と無声音以外に緩い Breite と表現された軟音と氣息音 aspirierte も含まれている。なぜ、有声音と無声音と同じ表にハイナッツがこれらの音を記述したのかについては、ハイナッツはこのように説明している。

<Ph>, <f>と<v>はほとんどの場合であるが、<th>, <t>は全ての場合において同じ発音である。これに反して、残りの軟音、有声音、無声音そして氣息音の綴りはより一層注意深く区別しなければならない。なぜなら、ほとんど全てのドイツの地域がこの点で重要な間違ひを犯しているからである。(Ebd.:29)⁸⁶

したがって、有声音と無声音の混同だけでなく、4種類に分類された綴りは全て、ドイツ各地で混同されているということからハイナッツは分類表として綴りを明確に区別することで、発音規則を明示しようとしたのである。例えば、軟音の<j>は多くの場合、ブランデン

ブルク地方では、<g>との区別が曖昧だと述べた。これは、正書法のレベルでも混同が見られ、jähe-gähe, Liljen-Lilge のような間違いがあると指摘した。⁸⁷

さらに、と<w>についても各地で発音の混同が見られるとし、誤用例として Gewölwe(Gewölbe), Biwel(Bibel), Liewe(Liebe), siewen(sieben), Pöwel(Pöbel), Schwalwe(Schwalbe), Elwe(Elbe), Erwe(Erbe), Farwe(Farbe) などを挙げた。(括弧内は正書法の表記である。) 氣息音に関しても同様に、例えば<ch>はウェストファーレン地方などでは<ch>と<k>の区別が曖昧であると指摘している。⁸⁸

<r>音について

ハイナッツの<r>に関する記述は以下の通り。その中でも具体的に<r>の調音方法について述べている部分を訳文の①～④とし、下線を引いた。

r は①舌尖を下の歯の裏に当てる、あるいは②舌を口の奥に引っ込める人の多くにほとんど w や h のように発音され、③舌尖を上部の歯の歯茎を突くようにさせることはない。それ以外の場合、④舌尖を口蓋に当てる人には、ほとんど1のように発音されている。第1の間違いは Schnarren と呼び、第2の間違いを Lallen と呼ぶことができるだろう。他では単音の r を二重化させて発音する人がいる。すなわち、hart を harrt と発音し、reden が rreden となる。Rh はドイツ人の中では完全に r の発音のように聞こえる。例えば Rhein を rein のように発音する。(Heynatz 1803:28)⁸⁹

以上のように少なくともハイナッツは4種類の<r>の調音方法について言及している。①②については現代の音声学で言うところの Reibe-R [ʁ] (摩擦音の R) であると思われる。同様に③は Zungenspitzen-R [r] (舌尖の R) であり、④は Zäpfchen-R [ʀ] (口蓋音の R) に当たるのではないかと考えられる。DUDEN (2015)では現在、[ʁ]/[ʀ]/[ʁ̥]/[r̥]/[r̥̥]が全て<r>音の標準発音のバリエーションとして認められており、さらに Vokalisierte-R (母音化の [ɐ̯]) も<r>の発音となっている。⁹⁰ つまり、「18世紀以降、口蓋垂の/R/音が広くドイツに普及し一般的な発音となったにもかかわらず、ゲルマン語の舌尖震え音/r/はドイツ語<r>音のプロトタイプであったことには変わりなかった」(神竹 2011:81) というように、18世紀は舌尖震え音の/r/がスタンダードとして支持された時代であったにも関わらず、ハイナッツは18世紀の時点で舌尖震え音/r/以外の<r>音のバリエーションを観察し、それを認めていたということになる。

語尾の<-ig>について

ハイナッツの観察によると、

語尾の-ig はドイツのほとんどの地域で-ik ではなく-ich のように発音されている。同様に短母音の後に続く g がその後に t を伴うと、<ch>に聞こえる。例：Agtstein (Ebd.:31) ⁹¹

<r>音に関してもそうだったように、この記述からはハイナッツはあくまでも<-ik>の発音よりも<-ich>の発音の方がよく聞かれるという事実を述べているに過ぎず、どちらが正しいかということ述べているわけではない。しかし、実際に DUDEN(2015)は語末の<-ik>については[ɪç]を標準発音として認めているわけであるが⁹²、未だに南ドイツなどでは破裂音の[k]として発音されている。すなわち、ハイナッツの考察は現代にも共通する部分があると考えられるであろう。

<sch>について

<sch>の発音規則については、ハイナッツは非常に細かい例を挙げて説明を試みている。

Sch はフランス語の<ge>のような発音をしてならない上、ウェストファーレン地方などのように母音の前の<sch>を<s>と<ch>あるいは<s>と<k>に分けて発音してもならない。さらに<l>, <m>, <n>, <w>の前にくる<sch>を<ß>のように発音してもならない。(Heynatz 1803:39) ⁹³

つまり、上記の条件下では<sch>が間違っ発音されているということをハイナッツは観察から導き出している。そして、別の発音項目では<s>と<sch>の発音の混同についても述べているので、⁹⁴ それらの発音規則で述べられた発音の誤用例については表 17 にまとめた。誤用の該当部分には下線を引いたので参照されたい。

表 17：<sch>の発音の誤用例⁹⁵

	正	誤
<sch>vs.<ß>	<u>S</u> chinken, <u>s</u> chlagen, <u>s</u> chmeißen, <u>s</u> chneiden, <u>s</u> chweigen	<u>ß</u> chinken/ <u>ß</u> kinken, <u>ß</u> chreien, <u>ß</u> lagen, <u>ß</u> meißen, <u>ß</u> neiden, <u>ß</u> weigen

<sch>vs.<s>	Person, Mars, Verg, färse	Perschon, Marsch, Versch, färsche
	Spaß, Stand, Sklave, Slaven, Smaragd, smyrna, golfo di squillace, Straße	Schpaß, Schtand, Schklave, Schlaven, Schmaragd, Schmyrna, golfo di schquillace, Schtraße,

今日では<sch>は[j]という表音記号で表される。一方で、<s>には幾つか発音にバリエーションがあり、[j]と発音される場合もあるが、<p>と<t>の前に<s>が語頭語としてくるドイツ語の単語、あるいは特にギリシャ語やラテン語に起源を持つ外来語の<st, sp>の発音の場合に限定されている。⁹⁶ つまり、ハイナッツが例示した語は現代の[j]の発音の説明と一致しているのである。

さらに、ハイナッツは<sch>と<ch>の発音を関連させて、<sch>と<ch>の二重化という現象についても言及している。すなわち、発音においては<ch>と<sch>は二重化されていて、その前にある母音が短音になるというのがハイナッツの言説である。例えば ma:chen は発音されると mach:chen のように聞こえるし、bre:chen は brech:chen、wa:schen は wasch:chen と発音されているということである。⁹⁷ 現在の正書法においても1音節ごとに分綴されるのが原則であるが、⁹⁸ ハイナッツは一つの単語が<ch>と<sch>の前で分綴されても、発音上では<ch>と<sch>は前の分節の発音に残っているということを指摘したかったのであると考えられる。以上のことからハイナッツは正書法上には見られない非常にユニークな発音現象を観察したと言える。

<ss>/<ß>について

<ss>と<ß>は今日では両方とも[s]と同じ表音記号で表され、発音上の違いはないということになっている。⁹⁹ したがって、<ss>と<ß>の区別は正書法と関係していることになる。これを踏まえてハイナッツは、

ßとは鋭いsであり、二重のs(すなわちss)の代わりにほとんどの語の音節の末尾とtの前にある。それ以外に発音においても同様にまた単音のsともきちんと区別されるべきなのである。したがって、例えば große は Rose や Rossen とは全く異なるのである。(Ebd. :37) ¹⁰⁰

ハイナッツは ss と ß だけでなく s も同時に考慮し、発音もそれぞれ違うものであると述べている。そしてハイナッツもまた、<s> ,<ss>と<ß>の違いについて正書法上の関係性から指摘しようとした。よって、ハイナッツは正書法と対比させながら、<s> と<ss>と<ß>について分析を行っている。表 18 はハイナッツが<s> と<ss>と<ß>が混同している単語として挙げた例をまとめて表にしたものである。該当部分には下線を引いているので参照されたい。

表 18 : <s>, <ss>, <ß>の正書法に関する一覧表¹⁰¹

1) 正 : ß 誤 : ss		2) 正 : ss 誤 : ß	3) 正 : s 誤 : ß
Bo <u>ß</u> el	Klo <u>ß</u>	einflö <u>ssen</u>	gew <u>es</u> en
Bu <u>ß</u> e	Kl <u>ö</u> ße	flo <u>ss</u> en	Rei <u>ß</u> es ¹⁰²
erbo <u>ß</u> en	Mu <u>ß</u> e	mü <u>ss</u> en	
Fu <u>ß</u>	mü <u>ß</u> ig	Ku <u>ß</u> ¹⁰³	
Fü <u>ß</u> e	N <u>ö</u> ßel	Sa <u>ss</u> en	
der gro <u>ß</u> e	Spa <u>ß</u>	Schlo <u>ss</u> en	
gr <u>ö</u> ß <u>e</u> r	pa <u>ß</u> en	zuverlä <u>ss</u> ig	
Gr <u>ö</u> ß <u>e</u>	sto <u>ß</u> en		
grü <u>ß</u> en	a <u>ß</u>		
sa <u>ß</u>			

4) 正 : ß 誤 : s			
au <u>ß</u> en	fu <u>ß</u> en	lie <u>ß</u>	Schwei <u>ß</u>
von au <u>ß</u> en	Gei <u>ß</u> el	Ma <u>ß</u>	schwei <u>ß</u> en
au <u>ß</u> er	genie <u>ß</u> en	ma <u>ß</u> en	Spie <u>ß</u>
äu <u>ß</u> erlich	Gie <u>ß</u> en	Ma <u>ß</u> e	spie <u>ß</u> en
äu <u>ß</u> ern	gie <u>ß</u> en	gebührenderma <u>ß</u> en	sto <u>ß</u> en
bei <u>ß</u> en	glei <u>ß</u> en	anma <u>ß</u> en	stie <u>ß</u>
blo <u>ß</u>	Glei <u>ß</u> ner	Mei <u>ß</u> el	stie <u>ß</u> en
blo <u>ß</u> er	Gru <u>ß</u>	Mei <u>ß</u> en	Stra <u>ß</u> e
entbl <u>ö</u> ß <u>e</u> n	grü <u>ß</u> en	Preu <u>ß</u> en	sü <u>ß</u>
drau <u>ß</u> en	ha <u>uß</u> en	Nei <u>ß</u> e	versü <u>ß</u> en
Flei <u>ß</u>	hei <u>ß</u>	Plei <u>ß</u> e	wei <u>ß</u>

Flei <u>ß</u> es	hei <u>ß</u> er	Quei <u>ß</u>	wei <u>ß</u> er
beflei <u>ß</u> en	hei <u>ß</u> en	rei <u>ß</u> en	Wei <u>ß</u> e
flie <u>ß</u> en	hie <u>ß</u>	Reu <u>ß</u> en	
Fu <u>ß</u>	hie <u>ß</u> en	schlei <u>ß</u> en	
Fu <u>ß</u> es	frei <u>ß</u> en	schmei <u>ß</u> en	

国際音声記号 IPA はもちろんのこと、音声学という分野もまだなかった時代にハイナッツは以上のような発音の観察を行っていたのである。「[中略] 彼は多くの興味深い観察を行っている。その際、彼にとっては、彼の特徴にふさわしく、正確で生理学的な説明は重要ではなく、文字によって覆い隠された発音に違いがあることを確かめることが重要なのだ」(Jellinek 1913:270)¹⁰⁴。と言われるように、ハイナッツの正音法を分析していると、発音をすると実際の綴りと異なる発音がされていること、さらに地域によって異なる発音の誤用が確認されることなどを詳細に観察していたことから、自身の耳を頼りにそれぞれの音の質を聞き分けるということをハイナッツは重要視していたように思われる。そして、発音観察を通して単に正しいか正しくないかで発音に正誤をつけるだけでなく、発音にある一定のバリエーションを認める寛容さも持ち合わせた。使用規範に徹底したハイナッツの正音法は当時のマイセン派を筆頭に「標準ドイツ語とはこうあるべきである」と、いわば肯定的に理想の言語規範を求めるのが主流であった時代の中で比べると、独創的だったと言えるであろう。

第3章 ハイナッツの歴史的な位置付け

3-1. ドイツ語標準発音規範の変遷

2章にてハイナッツの正音法に関する分析を試みたわけであるが、そもそも、ドイツで発音規範の統一が初めて行われたとされるのが1898年のジープスの『舞台発音』の刊行である。つまり、標準発音の統一までにはハイナッツの正音法から約100年の間隔がある。しかし、『舞台発音』はその題名の通り、舞台上の発音規則を統一したものであったのにも関わらず、一般でも使用される発音規則として舞台上の世界を超えて、ドイツ中に広まったという、独特な現象が起こった。したがって、ここでは『舞台発音』によって標準発音が統一されるまでの19世紀の歴史的な背景から、今日に至るまでの標準発音規範の変遷について見ていく。

まず歴史的背景による標準ドイツ語規範への影響を考えてみたい。ヴォルフ(1999)¹⁰⁵は

19世紀のドイツを産業化 *Industrialisierung*、都市化 *Urbanisierung*、近代化 *Modernisierung*、民主化 *Demokratisierung*、そしてイデオロギー化 *Ideologisierung* という5つの言葉で特徴付けた。つまり、発展が遅れていたドイツでも1830年頃には産業革命が起こり、大企業が多く創設され、産業化が進んだことでドイツの経済成長とともに市民の職業も多様化した。すると、必然的に労働力の集まる場所では都市化が進む。ハンブルク、ベルリン、ミュンヘンのような都市では人口爆発が起こり、ドイツにも次々と大都市が形成されていった。先述したように、都市言語が生まれたのもこの時代である。そして、テクノロジーも徐々に発展をみせ、産業革命以降、カメラ、電話、自動車そしてドイツ鉄道などが次々と普及し、このような近代化の産物は人々の生活水準を向上させ、モノや人のより広い範囲での移動を効率化させた。さらに、この頃から国家としても、市民生活においても行政や官僚機構が根付いていくようになった。このような動きの中で、1871年にはプロイセン王国で、現代からすれば平等な権利だったとは言えないが、選挙権が市民にも広く付与され、市民の政治的な関与の拡大、それに伴った教養層の変化がドイツに民主化をもたらした。そして、市民が台頭していく中で階級闘争なども活発化するのであるが、そういった対立を調和させる意味で行われたのがイデオロギー化である。19世紀はそれ以前の封建的な階級制が崩壊し、より人権という国民の権利が意識されるようになった。したがって、そのイデオロギーの根本は古典主義にありつつも、そこに新たに寛容さと人間性が付与された民主的な意識が人々にもたらされたのである。それと共に、急速な進歩を遂げるドイツを賛美するように、ツヴァイク *Zweig*、ワーグナー *Wagner*、ニーチェ *Nietzsche* などが展開した「強いドイツ」の思想がドイツ人の国民意識 *Nationalbewußtsein* に結びつき、ドイツ国家の形成を促すことになった。

このようにして、19世紀は18世紀までの階級社会とは大きく異なり、市民層が教養を持つようになる契機となった。つまり、今まで知識人だけの特権的なものであった学問の世界にも市民層が足を踏み入れていくことができるようになったのである。例えば、19世紀になるとすぐに、プロイセンの内務省の局長であったフンボルト *Humbolt* は人文主義的な教育理念に基づいた教育改革を行った。この人文主義が主体の人間教育 *Menschenbildung* を目指す動きがプロイセンに定着したことで、一般市民も広く教育が受けられる環境が整った。¹⁰⁶ そうなると、市民の教育のために、より広い範囲の社会層を包括した言語の統一規範が必要となった。その結果、まず1880年にはギムナジウムの学長であったドゥーデン *Duden* によって『ドイツ語の正書法辞典』 *Orthographisches Wörterbuch der deutschen Sprache* が出版され、これが今日のドイツ語の規範にもなっている *DUDEN*¹⁰⁷ の第1巻に当たる『ドイツ語正書法』 *Deutsche Orthographie* の原型となった。¹⁰⁸ ドゥーデンの正

書法は 1901 年の第 2 回正書法会議で正式に承認された。これはドイツ全土に渡って拘束力がある決定として宣言され、オーストリアやスイスでも同様にこの決議が締結された。¹⁰⁹ この決定はドゥーデンが「新たな正書法規範を考案したのではなく、ただ実際に存在する彼の学校の生徒たちの使用規範を把握し、差異を書き留め、その上に、もともとは自身の学校使用のために考えられたものだったのではあるが、作り上げた的確な規範を発展させることを成し遂げた」(Ehrlich 2008:27f.)¹¹⁰ ことをドイツ語圏の国家も認めたということを示す。要するに、18 世紀のように文学作品の中にある理想のドイツ語に基づいて、知識人らによってのみ追求された標準文章語とはまた異なる、使用規範 Sprachgebrauch に基づいた正書法がようやくドイツで確立されたということである。こうして、正書法は 20 世紀の初頭に今日の正書法規範に通ずる体系が受け入れられたのである。

一方で発音の規範化については依然として正書法の統一より遅れていたため、19 世紀に入っても、発音はまだ様々な地域方言がドイツ各地に存在している状態であった。しかし、とりわけルターの聖書以降から根付いた東中部ドイツの上流階級の言葉が模範的であるという認識は変わらず引き継がれ、その上、18 世紀末以降は書かれた通りに話す北ドイツの発音もまた模範的であると見なされていた。ところが、19 世紀の末になると、最良の標準ドイツ語について 2 つの共時的な見解が並行して出回るようになっていた。¹¹¹ すなわち、

1. 最良の標準ドイツ語は北ドイツで話されている。
2. 最良の標準ドイツ語は舞台上の正統な演劇の中で話されている。

(Ehrlich 2008:29, König 2004:109f.)¹¹²

というものであった。1. については、18 世紀に標準ドイツ語論争において、中心的存在だったザクセン地方が 19 世紀には経済的、政治的にも後退し、言語の領域においてもその名声は失われていた。¹¹³ 一方で、19 世紀は北ドイツのプロイセン王国が勢力を伸ばし、19 世紀の末にはドイツ帝国の中核となっていた。そしてプロイセンはドイツで最も強大な国として権力を持ったと同時に、教育制度の整備や文化的な発展も進んでいた。ゆえに、言語においても多くの作家が北ドイツで輩出されるなど、北ドイツの権威が高まっていたと考えられる。そして、2. に関しては「18 世紀末頃から 19 世紀初めの古典主義的な舞台演劇の普及と共に、最終的にドイツ語発音の中にも反映されたに違いない芸術分野における大きな変化をもたらした」(Ebd. 2008:29)¹¹⁴ と言われるように、19 世紀にはドイツ古典主義を代表するゲーテ Goethe やシラー Schiller の演劇が市民層にも広く人気を博した。するといつしか、とりわけ教養市民の間で、「古典主義の言葉=良いドイツ語である」という認

識が芽生えたことで、舞台の言葉はドイツ語の発展の中でも突出して価値が与えられることとなった。¹¹⁵

しかし、演劇を上演するためには出身の異なる演者たちも演出の中ではできるだけ統一された発音で舞台を提供しなければならない。言葉の個性、いわゆる方言は観客に違和感を与え、作品の雰囲気壊してしまう可能性があるからだ。特にゲーテはそのような方言のぼらつきを嫌がったため、1775年にヴァイマルに移住し、その名を轟かせていた間は、彼の口述による指導が演劇上の発音基準であった。しかし彼の意図する「純粋な発音 *reine Aussprache*」、「純粋なドイツ語の方言 *reine deutsche Mundart*」や「ドイツ語の一般規則 *die allgemeinen Regeln der deutschen Sprache*」といったゲーテの表現は演者たちに対して具体的にどのような発音を求めているのかが不明瞭なままであった。そしてゲーテの没後、舞台俳優らは特定の言語指導者によって教育されたため、その指導者の発音が演劇上の発音規範となった。しかし、文書で正確に書き記された規範がなかったため、標準発音の統一には至らなかった。¹¹⁶ したがって、発音の統一規範を求める声は演劇の世界からもあがり始めたのである。こうして、強大化するドイツ帝国を背景に、市民の教養と演劇での言葉が結びついた19世紀末には、北ドイツの発音と、演劇で使用される発音という2つの標準発音の概念がダブルスタンダード化されてしまったというわけである。

このような中で、英語学者で語学教育者だったヴィエトール Viëtor が1885年に『文章ドイツ語発音』¹¹⁷ *Die Aussprache des Schriftdeutschen* においてドイツ語の発音規則を体系化し、発音辞典として発表した。後に説明するジープスの『舞台発音』はヴィエトールの発音規則の13年後、1898年に出版されたにもかかわらず、ドイツで初めての発音規範であると言われることがある。というのも、ドイツの標準発音の統一に実質的な影響を与え、発音の統一をもたらしたドイツで最初の発音規範という意味で注目されたのはジープスであったため、ヴィエトールの存在が弱まってしまっているのである。¹¹⁸ しかし実際は「ヴィエトールは、ジープスが数年後にもたらしたことを、教示した」(Hollmach 2007:63)¹¹⁹ と言われるように、ドイツで初めて発音規範を発表したのはヴィエトールであるという見解は複数のゲルマニストによって示されている。¹²⁰ ジープスより知名度は劣るとはいえ、音声学的見地に基づき、ドイツ語の発音を初めて国際音声記号 IPA で表したヴィエトールの発音辞典は高い評価を得て、1912年より『ドイツ語発音辞典』*Deutsche Aussprachewörterbuch* とタイトルを変えながら、1941年の第13版まで版を重ねた。

そして、ヴィエトールの後に登場するのがジープスである。もともと『舞台発音』はジープス単独の著書というよりは、「形の上では1898年4月14日から16日までベルリンの王立劇場で行なわれた舞台発音統一委員会における討議の結果を Siebs が委員会の依頼に

よってまとめたもの」(江沢 1968:4)である。この著作の中では実質的に、低地ドイツ語の発音重視の標準発音が記述された。例えば低地ドイツ語の特徴である無声破裂音と有声破裂音 (p/t/k, b/d/g,) の切り離しを推奨しながら、方言色のない発音を基本的に求めるといふ矛盾があったのだ。¹²¹ したがって標準発音としながらも、低地ドイツ語の方言に偏っていた『舞台発音』には批判の声も上がった。¹²² しかし、

舞台俳優の発音の使用規範において主に低地ドイツ語によって特徴づけられた『舞台発音』の成立過程は [中略] 結果的に低地ドイツ語圏 (つまり、北ドイツのブレーメン、ハノーファー、メークレンブルクのような街) の話し言葉のバリエーションが今日の標準ドイツ語発音に最も近いという印象を与えた。(Ebd. :34)

123

というほどジープスにはインパクトがあったのである。なぜなら、「ドゥーデンとジープスはこの時から、学校で教えられ、また印刷業者にとっても政府機関のように拘束力のある、公の標準言語を定めた」(Wolff 1999:186) ¹²⁴ と言われるように、20世紀の初頭には「正書法規範のドゥーデン、発音規範のジープス」として舞台上だけでなく学校教育に使用されたのである。こうして、一般的な発音規範として受け入れられたことがジープスの権威性を高めた要因である。したがって、1898年に初版が刊行されたジープス『舞台発音』は、ジープスの死後も改訂が続けられ、1969年の第19版まで版を重ね続けたのである。おそらく、ジープスは当時の北ドイツの発音と演劇の発音というダブルスタンダードの発音規範の需要を満たす形で『舞台発音』を著したことが、結果的にジープス以前に発音規範を発表したヴィエトールよりもインパクトを持ったのであろう。

しかしながら、先述したように、『舞台発音』を一般的な使用規範として支持することに疑問を持つ声は早くからあり、「舞台発音は、日常生活においてその使用とは例外なくずれている力強い声の使用を基本としている」(Ebd. :35) ¹²⁵。すなわち、実際の日常会話に使用される発音には『舞台発音』は適していないのではという指摘が、標準発音の規範概念に関する議論を改めて引き起こした。そのうち、1920年代にはラジオなどの音声機器が台頭し、そこでは演劇で使われる芸術的な言葉ではなく、ニュースやインタビューといった情報伝達の為に使用される言葉づかいが必要となった。¹²⁶ すると時代のニーズに合わせるように発音規範も改めて見直され、『舞台発音』の最終版となった第19版はタイトルが『ドイツ語発音～標準語・舞台語・日常語～』*Deutsche Aussprache. Hochsprache · Bühnensprache – Alltagssprache* となり、第19版の編纂者¹²⁷ は標準発音と舞台発音とそれぞれをタ

イトルに分けて明記し、舞台発音と日常語としての発音規範との間の概念を区別するという措置を取った。

『舞台発音』の変遷の傍で 1960 年代には、ようやくハレ大学で先進的な音声学の研究を行っていたクレッヒ Krech によって、実際の発話現象 Sprachrealität に基づいた標準発音が提唱された。¹²⁸ そしてクレッヒが中心となって作成した発音辞典『ドイツ語発音辞典』*Wörterbuch der deutschen Aussprache* (1964) (以下、WDA と略記) が出版される。「通常の話し言葉での発話の実態(Sprechwirklichkeit)への対応が、ハレ大学の発音辞典の原点」(高橋 2014:40) であるという WDA はすなわち、『舞台発音』とは方向性が全く異なり、徹底して実際の発話現象を音声学的分析し、規範化したものであった。その後、WDA は第 4 版まで版を重ね、1982 年には *Großes Wörterbuch der deutschen Aussprache* (GWDA) とタイトルを変えて出版され、2010 年には *Deutsches Aussprachewörterbuch* (DAWB) というタイトルで出版されている。しかし、これらの改訂はすべて以前までのものを現代に適応させるために行われたものであり、日常語の慣習 Sprachgebrauch に基づく使用規範であるというコンセプトは変わらない。¹²⁹ つまり、この WDA により使用規範に基づいた標準発音が認められ始めた。使用規範としてドゥーデンの正書法が受け入れられてから約 60 年の月日が流れた後のことである。

1960 年代は DUDEN (1962) も『発音辞典』*Das Aussprachewörterbuch* を初めて出版した。しかしながら、現在の DUDEN の発音辞典とは異なる特徴があった。すなわち、「DUDEN は『舞台発音』と比べると「最も穏やかな発音規則」の基本的性質が論究されたのであるが、しかしまだ最も高い優先順位を舞台発音に与えているので、その発音規範は単語一覧への入り口を見出していなかった」(Ehrlich 2008:40) ¹³⁰ のである。

1960 年代に出版された 3 つの発音辞典の特徴を整理すると、舞台の為の発音規範が本来のコンセプトであった『舞台発音』、反対に、日常語における使用規範をまとめた WDA、そして、この両者の中間に位置すると言えるが、『舞台発音』の影響を強く受けていた DUDEN というそれぞれの立ち位置が見えてくる。同時に、18 世紀に端を発した標準ドイツ語論争から振り返って考えてみても、この発音規範の多様化はドイツにおける標準語の規範概念そのものが変化してきたということも示していると言えるだろう。

3-2. 現代ドイツ語の標準発音とその規範概念

18 世紀の文法家たちは標準ドイツ語を Hochdeutsch (Hochsprache) という用語で表した。とりわけ、ハイナッツはその Hochdeutsch を構成する要素の一つとしての正音法を Rechtsprechung/Orthoepie と呼んだ。このように標準語または標準発音を示す学術用語

Termini はドイツ人の規範概念の変遷を見ていく際の重要な手がかりとなる。現在では Hochdeutsch の同義語として Standarddeutsch (Standardsprache) が使用される場合が多い。それに伴って標準発音は Standardaussprache と表されているのだ。しかし、この学術用語については発音辞典の中でもその扱われ方が変わってきた。エアリッヒ Ehrlich (2008) は 1960 年代以降に出版された 3 つの発音辞典がそれぞれ、「標準発音」という概念をどのような用語で表しているかを表にまとめている。したがって、表 19 は筆者がエアリッヒ(2008)の原文に従い、必要に応じて訳出したものである。

表 19：発音規範の様々な学術用語 (Ehrlich 2008:41)

規範	年	用語
ジープス (～第 18 版)	～1961	Bühnenaussprache
DUDEN (第 1 版)	1962	Hochlautung
WDA	1964	Hochlautung/Standardaussprache
ジープス (第 19 版)	1969	gemäßigste Hochlautung vs. reine Hochlautung
GWDA	1984	Standardaussprache
DUDEN (第 4 版)	2000	Standardaussprache bzw. -lautung vs. Bühnenaussprache
DUDEN (第 6 版)	2005	Standardlautung vs. Bühnenaussprache

このように、ジープスでは舞台発音 Bühnenaussprache という用語がそのまま 18 版までタイトルとしても使用され続け、同時に標準発音の概念として捉えられていた。そして DUDEN が 1962 年に最初の発音辞典を出版した際には WDA もジープスも、Hochlautung という言葉を標準発音の概念を表す用語として使用した。しかし、その“Hoch-„ という言葉の本来の意味を考えると、「改めて「高尚な言語階層」という意味合いの連想を呼び起こすかもしれない」(Ehrlich 2008:13)¹³¹ ということが考慮され始め、さらに「他の言語変種 (例えば、日常語、方言) の蔑視という結果になる」(Ebd.:13)¹³² と判断されるようになった。以上のことを踏まえたクレッヒは WDA (1964) の初版当初から Hochlautung と同時に Standardaussprache という用語を用いて、標準発音の概念を表した。DUDEN も第 2 版(1974)では WDA(1964)の影響を受け、初版のタイトルに加えて、『ドイツ語の標準発音の辞典』*Wörterbuch der deutschen Standardaussprache* という副タイトルを付けた。さらにこの用語の変化は、DUDEN にとっては舞台発音の規範化ではなく、一般的な使用に基づく発音規範を定めたものであり、これまでの『舞台発音』よりも共通の模範として適して

いるという意図を示す狙いもあった。したがって、内容に関しても WDA のように使用規範として変わっていったのである。¹³³ そしてメディアによって、標準発音は Standardsprache として広まり、学校や大学などの国家の教育体制を通してすべての言語階層に広く伝えられることで、¹³⁴ 「標準語は今日の使用規範の中にはっきりと定められている」(Wolf 2013:18)¹³⁵ のである。

しかし、DUDEN は第 2 版以降、実際の発話に基づいた使用規範へと舵をきっていったものの、その初版がそうであったように、2005 年の第 6 版に至っても標準発音の規範概念に舞台発音の存在が深く関係している。この後、DUDEN はさらに 2015 年に第 7 版を出版し、現在では第 7 版が最新となっている。したがって、表 20 は DUDEN が第 4 版(1990)において示した標準発音の規範概念と、第 7 版で示したものを比較し、まとめた。

表 20 : DUDEN 第 4 版(1990)と第 7 版 (2015) の規範概念の比較

第 4 版(DUDEN 1990:34f.) ¹³⁶
1. (DUDEN で示される) 標準発音は発話現象に近い使用規範である。しかし、話し言葉の多様なニュアンスを完全に反映させることを要求するものではない。
2. 標準発音とは超地域的なものである。標準発音は典型的な地方独特の発音形式を含まない。
3. 標準発音とは統一的なものである。変種 (拘束のない変種と音素変種) は排除される、あるいは最小限に限定される。
4. 標準発音とは書き言葉に近いものである。すなわち書記体系によって広く決定づけられている。
5. 標準発音とは明確で、その発音は日常の発音より強いものとして区別される一方で、より大げさな明確さに傾いている舞台発音よりは弱いものとして区別される。
第 7 版 (DUDEN 2015:31f.) ¹³⁷
1. 標準発音は発話現象に近い使用規範である。なぜならそれは基本的に経験による方法の結果を拠り所としており (言語コーパス、アンケート)、使用規範と並んで超地域的な職業であるアナウンサーによる、また民衆の間でも通常の標準発音を考慮しているからである。
2. 標準発音は大多数において超地域的な一般的な発音形式を含む。しかしまた、ドイツ語圏内でしか共通でない、または域内でのみ慣習となっているような言葉

も含む。[以下省略]

3. 標準発音は音韻論的に原則、統一的に表されている。すなわち標準発音がとりわけ国家と地方の変種の間が存在しているように、体系的な音声学と音韻論的な変種は表現上の合理性の理由により、できる限りフェードアウトさせなければならない。[中略] 体系的でない、または音素のレベルで不規則に生じる変種は、それがいくらか知られている場合は掲載されている。

4. 標準発音は基本原理においては書き言葉に近いものであるが、規則的な書記法と発音の一致に矛盾を示すなら、疑わしい場合には実際の使用規範に従う。

第4版では「舞台発音は一種の理想規範だ」(DUDEN 1990:62)¹³⁸とし、DUDENはあくまでもその対立にある発音の使用規範を定めたものだとしながら、その規範概念においてはまだ舞台発音を意識した項目が見られる。つまり第4版の時点では、DUDENは舞台発音の規範概念の影響下にあり、完全な脱却はできていなかったものと考えられる。しかしその後、舞台発音について記述される5番目の項目は徐々に定義から外れ、第7版においては第5項目が消滅する。つまり、第7版においてはDUDENが舞台発音から完全に脱却したということが見て取れるのである。

もちろん、技術の発展も標準発音規範に多いに影響を与えてきた。ハレ大学で1950年代最初に始まった標準発音の分野における体系的研究¹³⁹は、それ以降、音声学の技術の発展とともに、より詳細な分析と蓄積されたデータに信頼性が得られるようになった。これにより、舞台発音という理想規範より日常語の発音を重視した使用規範の研究が進んでいったのである。

さらに、DUDENの規範概念の変化は舞台発音からの脱却だけでなく、変種 *Varietät* についての捉え方にも表れている。我々は普段、時と場合に合わせて、標準語だけでなく方言や日常語という言語形式を使い分けているわけで、「他の言語形式に勝っているものなどなく、良い悪いではない」(Ehrlich 2008:13)¹⁴⁰。そう考えると、方言が地域それぞれにあるように、標準語も決して1つだけではないはずだ。ゆえに、「変種は個々の統一を通して変型を定められる、言語的(言語学的な)体系を表す」(Hollmach 2007:29)¹⁴¹として、オーストリア・ドイツ語、スイス・ドイツ語といったそれぞれの社会集団の中で有効性を発揮する発音の変種を現代では標準変種 *Standardvarietät* という用語で定義することができる。すなわち、標準変種という概念は標準発音の拡張概念であり、標準変種を通して発音規範に一定のバリエーションが認められるようになったのである。¹⁴²

かつては「標準語はこうでなければならない」と言語の中に唯一無二の規範を見出そうと

していたドイツ人の標準語の規範概念は200年余りの間に、大きく変容してきたと言える。特に発音に関しては、ジープスの舞台発音から現代の DUDEN まで大きくその規範概念が変わってきた。それゆえ、ドイツ人は標準語という言語形式をあまりにも観念的に捉えすぎていたと言えるのかもしれない。なぜならドイツに対し、歴史的に早くから中央集権国家であったフランスや日本では、王室や政府のある首都の言葉がそのまま広まった。標準語のモデルが存在すれば、実際に話されている言葉がそのまま伝わっていくので、標準語を観念として捉えることはないだろう。そういう意味ではドイツにおける標準語の規範概念は非常に独特な変遷を経てきたと言える。

3-3. ハイナッツの正音法研究の意義

3章で述べてきたように、今日の標準語 Standardsprache は実際に話される言語使用を定める規範として認識されている。つまり、これはハイナッツが正音法の目的とした、使用規範の確立と一致する概念とみなすことができると言える。ハイナッツの正音法の意義を考えるにあたって、いくつかの客観的要素と照らし合わせて考えてみたい。

まず、なぜドイツ人の中に標準語という明確な概念が必要であるか。それは、すでに本論で述べてきたように、そもそも18世紀においては啓蒙主義によって、知識人の中にラテン語やフランス語と同等にドイツ語を国語として捉える意識が芽生えたことで、統一言語の必要性が高まり、結果的に理想規範に基づいた標準文章語が生まれた。そして、19世紀には教養市民の台頭によって、より広い範囲の人々のための使用規範に即した標準語が必要とされるようになった。しかし、ここではもっと本質的なところから考えてみたい。ヴォルフ Wolf (2013) はそもそも標準語という概念が生まれるためには、ドイツ人の中に「何が正しくて、何が間違いなのか richtig/falsch」という規範的境界が存在しなければならないという前提条件を述べている。逆説的に言えば、そのような認識がされない限りは標準語という概念は存在しえないのである。このような現代におけるドイツ人の言語認識 Sprachbewusstsein は19世紀以降、ジャーナリストや作家や他の言語に携わる人々の職業が社会的な価値を持ったことで、正しい、あるいは間違ったドイツ語の区別や、場合によっては、「良いドイツ語」の識別が特別な問題として提起されてきたという。¹⁴³ つまりは、認識論的見地からは19世紀以降を今日の標準語の成立過程として見ていることとなる。確かに、「ゴットシェートとアーデルングは日常語の言語形式に関しては非常に曖昧に表現していた」(Ernst 2012:214)¹⁴⁴ のであるから両者によって定められた文章語の規範は使用規範とは言い難く、理想規範として認められるというわけである。しかし、ハイナッツに関してはその正音法が日常語の発音観察を通して構成されていること、そして、

公的な学校でたくさんの言葉の間違いや書き間違いを直す機会が私にはあるが、
注釈をつける才能の点でひょっとすると私よりずっと優れている人の多くに、そ
の機会が欠けている。(Heynatz 1771:42f) ¹⁴⁵

という記述からも、ハイナッツの言語認識の中には使用規範としてのドイツ語の「正しい・
間違っている」という概念があったのではないか。「学校での間違い直しの際には何が正し
くて間違いであるかが、修正をする教師にとっても、修正された生徒にとっても重要である」
(Wolf 2013:21) ¹⁴⁶。とされるように、ドゥーデンの正書法の場合も、ドゥーデンも生徒
の書き間違いを書き留め、分析した辞書が後に使用規範と見なされた。しかし、現在行われ
ている発音規範の研究においては、その多くが19世紀後半のヴィエトール以降を扱ってい
るため、18世紀はゴットシェートやアーデルングの言語規範が比較される程度で、ハイナ
ッツの正音法が比較対象として検証されることがなかったのである。¹⁴⁷しかし、ハイナ
ッツの正音法を使用規範として捉えて、<e>音や<r>音のバリエーション分析や、<e>と<ä>の
方言的誤用の分類や、有声・無声破裂音の考察等を見ていくと、現代に改めて分析されうる
価値を持つと思われる。

しかしそうすると、ハイナッツの正音法は規範と見なされるものだったかという疑問が
生じる。Hollmach(2007)によれば、現代における普遍妥当的な標準発音 *Allgemeingültiger
Aussprachstandard* の基準¹⁴⁸は

- (1) 超地域的である
- (2) 社会的部類を包括していること
- (3) 高い権威性
- (4) 規範化されている、模範的である

という4つの要素が必要であるとした。ハイナッツの正音法の場合、18世紀はドイツが
統一されていなかったことから、超地域的という概念を厳密に同一化させることはできな
い。しかしハイナッツは他の地域の出身者同士が話すときに使われるべき言葉を標準ドイ
ツ語だと明確に述べていたことから、(1)の基準に当てはまると考えられる。そして、(2)
についても当時は社会階級がはっきりと分かれていたので、現代とはそのまま比較できな
い。しかし、ハイナッツの文典は学校での使用を目的として作成されており、発音観察もそ
の誤用例などを挙げていることを考えると、限られた階級ではなく、社会一般を広範囲に対
象としたと思われる。つまり、ゴットシェートやアーデルングのマイセン地方の上流階級を

模範とした規範と比べれば、ハイナッツの正音法はより広範囲を包括したものと考えられる。

(3) についてはハイナッツの権威はゴットシェートやアーデルングには及ばなかったと考えざるをえない。しかし、ここではハイナッツの正音法がそもそも規範か否かということを検証するため、(4) の規範化されているかという点を最も注視しなければならない。発音規範あるいは指南書は、その使用目的をもって分類されうる根拠が存在する。表 21 は Hollmach(2007)に従って、使用目的によって3つに区分された発音規範を示したものである。

表 21：発音規範の分類¹⁴⁹

(1) 一般的な発音規範 <i>allgemeine Aussprachekodizes</i>
(2) 専門分野のための規範 <i>Domänenkodizes</i>
(3) 発音の指南付きの規範 <i>Kodizes mit Aussprachehinweisen</i>

(1) は辞書あるいはデータバンクであり、その目的が超地域的で、普遍的に妥当である発音を記述しているものを指している。模範的な機能を持ち、普遍的という理由から使用範囲を限定しないものであるから、(1) には DUDEN はもちろんのこと、ヴィエトールやジープスの発音辞典が含まれる。(2) はメディアや音声学向けの特定の使用に合わせられたものを指す。(1) よりも狭義の範囲の規範であることから (1) とは区別される。(3) は発音規範として作成されていない辞典ではあるものの、使用者に語の意味と並行して、使用のために必要な正しい発音を提供するために正音法的な注意書きや指南が描かれているものを指している。ここで、提供される発音は (1) の規範と一致しているものである必要がある。DUDEN の『外来語辞典』*Fremdwörterbuch* (1990) などがここに含まれる。

では、ハイナッツの正音法はこの分類と関連させられうるかということであるが、ハイナッツは発音の規則を述べるだけでなく、当時まだ確立されていなかった調音音声学に類似した説明も交えながら、誤用例も含めて発音観察によって収集し単語を一覧表として載せるなど、正しい発音の方法を指南するものとして正音法を記述した。つまり、その単語の集積が発音規範を構成するデータバンクの先駆けとして捉えられる。もちろんデータバンクとして体系化はされていないが、一定の規則性が見出されるだけの単語の集積がされている点でハイナッツの正音法は現代の発音規範の基準に準じる規範要素を有していると捉えることができる。

それゆえに、使用規範を定めるハイナッツの正音法の場合、その規範概念はジープスの舞台発音よりもさらに現代に近い、WDA や DUDEN のような発音規範の概念と一致すると

考えられる。つまり、ハイナッツは 18 世紀の理想規範が求められた時代の中で捉えられるのではなく、むしろ、標準発音 *Standardaussprache* が使用規範と結びついてドイツ人の中に明確に理解されている今日の規範概念と比較し、もう一度その功績を再評価されるべきであり、ここにハイナッツの正音法の本当の意義があると考えられる。18 世紀当時ハイナッツの支持者であったドイスト Deust がハイナッツの功績について「いつか明るみに出ることを祈ってやまない」(Deust 1773: 61f.)¹⁵⁰ という言葉を残したように、ハイナッツの研究には現代に通ずる多くの画期的なアイデアが残されており、歴史の影に隠れるにはあまりにも惜しい文法家なのである。

おわりに

イエリネク（1913）は「言語現象を正しく描写することがハイナッツにとっての一番重要なことである。」（Jellinek 1913:270）¹⁵¹ とハイナッツの特徴を分析し、ハイナッツの「観察者 Beobachter」としての研究姿勢を評価した。これに関して、近代言語学の祖と言われるソシュール Saussure が示したラング langue、ランゲージュ langage、パロール parole の定義と合わせて考えてみたい。ソシュールはラングとパロールに明確な区別を与えることによって、「1. 社会的なものを、個人的なものから、2. 本質的なものを、副次的であり・多かれ少なかれ偶然的なものから」（Saussure・小林 1982:26）切り離した。すなわち、ラングは個人と個人の間でランゲージュを形成する社会コード、つまり構造そのものであり、受動的に行われるものとした。対してパロールは個人的なもので日常の言葉である。そしてそれは能動的に表象される、いわば発話行為を指す。このラングとパロールは相互作用しながら変容する関係としながら、ソシュールは個人の数だけ存在するパロールは研究対象とせず、ラングのみを言語学の研究対象とした。さらに、ソシュールの言語学で扱われる通時態ではそのパロールの変容に関して述べられる。つまり、パロールは通時的に見ると変化し、それに伴ってラングも変容していくとするのである。このソシュールの言語学を考えた時に、イエリネクはハイナッツを「観察者」という言葉を通して、ハイナッツがパロールを通してラングの研究に取り組んだということ図らずとも明示したと拡大解釈できる。もちろん、イエリネク（1913）がその記述を残した時に、ソシュールの言語学はまだ書籍として発表されていなかったが、ハイナッツの発音観察はまさに「言語現象の描写」そのものであり、ソシュールの定義するパロールに近い意味として捉えることができる。

ハイナッツは未完の辞書を書いている。『可能な限り完全な類語辞典の試作』 *Versuch eines möglichst vollständigen synonymischen Wörterbuchs* (1795/98) と題した辞書は、理由は不明であるが、Eまで書かれたところで終わっている。¹⁵² しかし、類語辞典を作成するにはまず、外来語とドイツ語など類語の組み合わせを抽出し、意味の差異、用法の変遷など、まさに当時のドイツ人が実際に使用する上での語感を的確に捉えなければならない。それを試みたということは、ハイナッツはやはり「日常の言語使用の中に重要な修正剤」（Korrektiv）（Günter 1999:53）¹⁵³を見出した言語の観察者だったのである。

注

- ¹ „nach den Mustern der besten Schriftsteller“ (Wolff 1990)
- ² „das erste vollständige Wörterbuch der deutschen Sprache“ (Ehrlich 2008 S.24)
- ³ 重藤(2017) 14 頁参照
- ⁴ 高田・新田(2013) 207 頁～参照
- ⁵ Schottel (1641: 177)を参照されたい。
- ⁶ Jellinek (1913) S. 248
- ⁷ „In Bezug auf den Normierungsprozess war es Gottscheds Anliegen, keinen bereits bestehenden Sprachgebrauch als übergreifende Norm zu bestimmen, sondern eine freie „Kunstsprache“ zu entwickeln.“ (Ehrlich 2008:24, Ernst 2005)
- ⁸ Vgl. Faninger (1996) S.39
- ⁹ ここでは文典の初版を出版した 1770 年に勤めていたクラウエン・クロスターギムナジウムのことを指す。
- ¹⁰ „Weil ich aber dort die Anfangsgründe der Deutschen Sprache zu lehren bakam, und bei dieser Gelegenheit auch mit dem Kern der Deutschen Sprachkunst von Gottsched, dessen Grundlegung ich ehemals mehr als Einmal mit untermischtem Unwillen und Lachen gelesen hatte, [...] so fing ich an, jene Entwürfe zu verschieben, um zu einer Deutschen Sprachlehre Vorrath zu sammeln.“
- ¹¹ 高田・新田 (2013) 30 頁参照
- ¹² 神竹 (1996) 13 頁参照
- ¹³ „Ist Hochdeutsch die Sprache einer einzigen Provinz oder ein hybrides Konstrukt aus dem Besten aller Dialekte?“
- ¹⁴ „Das theoretische Diskussion über den rechten Weg zum Hd. mag zum besseren Verständnis des Verständnisses zwischen regionalen und überregionalen Sprachformen, [...] beigetragen haben. Das Niveau der Diskussion aber war nicht hoch, manche Positionen, besonders die der „Meißner“, ideologisch erstarrt, das Verständnis von Sprache undifferenziert und mechanistisch.“
- ¹⁵ Umgangssprache の訳語は高田・新田 (2013) を参考とする。
- ¹⁶ „[...] wurde die Aussprache der Norddeutsch als vorbildhaft erklärt, weil sich dere Aussprache mehr am Schriftbild orientierte und sich die deutliche Unterscheidung der plosivlaute als günstig für die deutsche Hochlautung erwies.“
- ¹⁷ König (1994:102)によるものである。
- ¹⁸ ハイナッツは書簡の中でこの論敵は *Allgemeine deutsche Bibliothek* (1772) の批評家のうちの 1 人で、Herr Om. という匿名の人物でゴットシェートの支持者だと述べている。(神竹 2006:14, Heynatz 1772:6ff)
- ¹⁹ 今日では術語学 (Terminologie) とされる。(Günther 1999. Vgl. S.53)
- ²⁰ Vgl. ADB (1880) S. 374f.
- ²¹ „So war sein Ruf als Gelehrter schon vor seiner Uebersiedelung nach Frankfurt wohl begründet.“ (Schwarze 1873)
- ²² 『フランクフルトの学校計画』 *Frankfurt a. O. Schulprogramme* は 1775 年から 1808 年までハイナッツによって作成されている。(Siehe: Schwarze 1873:57f., Günther 1999: 56)
- ²³ ドイツで用いられる慣用表現。知識を漏斗で流し込むような、機械的で安易な学習方法または教育方法という意味。
- ²⁴ „Die Philanhropische Pädagogik, die Heynatz vertritt, setzt bei ihrer Erziehung zu

Nützlichkeit und Brauchbarkeit nicht auf den Nürnberger Trichter, sondern auf das „selbst und freiwillig arbeitende Subjekt.“

²⁵ bei den seinen Schülern feststellen kann „Wie die Fertigkeiten nach und nach erstarben, wie die Erfindungskraft und das Selbstdenken angeregt wird, wie vernünftiger Zweifelmuth, Liebe zum Untersuchen, Betrachtung der Dinge von mehreren Seiten Platz gewinnen und zunehmen.“

²⁶ „die Mexime, jederzeit selbst zu denken, ist die Aufklärung.“

²⁷ „Heynatz scheint Zier- und Blumengärten keine große Bedeutung beigemessen zu haben, denn sein Gartenbuch beschäftigt sich allein mit Nutzpflanzen für die Käche.“

²⁸ „Ihre Vertreter sahen im Philanthropinismus die Inkarnation des bösen Prinzips in der Gymnasialpädagogik und verachteten die Philanthropen als Leute, denen allein das Nützliche heilig, das Platte wahr, das Gemeine verständlich ist“

²⁹ „Diese [...] Kritik setzte sich vom Ende des 18. Jahrhunderts ab durch und trug dazu bei, das Leben und Werk von Pädagogen wie Heynatz fast völlig vergessen wurden.“

³⁰ Schottel (1663: 174)を参照されたい。

³¹ 高田・新田 (2013) 230 頁参照

³² „[...] in eigentlich Deutschen Wörtern folgt der Ton einer so leichten und übereinstimmigen Regel, daß dessen Bezeichnung in den allermeisten Fällen unnöthig ist.“

³³ „Allerdings könne eine gesprochene Sprache keine Norm sein, sodass man die Werke der „besten Schriftsteller“ zu Hülfe nehmen müsse.“

³⁴ „Ein geborner Deutscher muß sich beflleißigen, gutes Deutsch zu reden und zu schreiben.“

³⁵ Heynatz (1785) S.1f.

³⁶ „Man muß solche Wörter gebrauchen, die von allen guten Deutschen gebraucht und gebilligt werden.“

³⁷ „Man müß solche Wörter gebrauchen, die grade das und nichts anders sagen, als was man sagen will.“

³⁸ „Man muß die Wörter [...] auch sie in Verbinden setzen, daß sie in der rechten Folge stehen, und allemal die erforderliche rechte Endung gebraucht werde.“

³⁹ „Es müssen ausgesuchte Wörter und Redensarten, geschickte Wendungen, wohlklingende Ausdrücke und Verbindungen gebraucht [...] werden.“

⁴⁰ Ebd. S. 2f.

⁴¹ 現在では Niederdeutsch も Plattdeutsch も 同様に 低地ドイツ語 と 訳されるが、ハイナッツは上部ザクセン地方の方言が基盤となったドイツ語を Niederdeutsch と呼び、訛りがひどく、下級層の人々が話す言葉を軽蔑的に Plattdeutsch と呼んでいる。

⁴² „Die beiden Hauptmundarten der Deutschen Sprache sind die Hochdeutsch und Plattdeutsche. Letztere wird in Schriften jetzt nur noch äusserst selten, und beinahe bloß zum Scherz, gebraucht; man redet sie aber in Westfalen, Niedersachsen, der nördlichen Hälfte von Obersachsen, in Preußen, Kurland, Liefland und Schleswig sehr häufig, besonders auf Dörfern und in kleinen Städten, wo mancher, und vorzüglich der gemeine Mann, etwas, das man hochdeutsch sagt, entweder gar nicht oder doch sehr unvollkommen versteht, wiewol das Plattdeutsche auch unter Leuten von geringerm Stande immer mehr und mehr von dem Hochdeutschen verdrängt wird.“

⁴³ „Hätten die ersten unter den neuern guten Schriftstellern in Schwaben oder Tyrol geschrieben, so würde die Büchersprache mehr schwäbisches oder Tyrolisches enthalten. Jetzt kommen die andern Provinzen zu spät; wir dürfen ihnen nicht folgen, auch wenn sie nach Gründen recht haben.“

⁴⁴ „Das beginnende 19. Jh. führte zu einer enormen Bevölkerungsexplosion und Bildung der Großstadt Berlin, in die nun täglich tausende Arbeitskräfte strömten und die

dort vorgefundene Stadtsprache, die erst jetzt ihre charakteristischen lexikalischen Ausprägungen erhält.”

⁴⁵ ハイナッツの文典について、本論の正音法分析では 1803 年に出版された最終版である第 5 版を使用した。

⁴⁶ „Die Rechtsprechung lehret eigentlich nur das recht aussprechen, was recht geschrieben ist; man muß aber auch das recht aussprechen, was unrecht geschrieben ist, indem man die Rechtschreibung in Gedanken verbessert; z.B. wenn man gleich beßer geschrieben findet, so spricht man dennoch besser. So auch Cöln wie Köln, hieng wie hing, schuff wie schuf, Ewer oder Ewr wie Euer usw.“

⁴⁷ „Die Aussprache des gemeinen Lebens ist in keiner Gegend von Deutschland völlig richtig, und ob man gleich die Meißnische und die Brandenburgische Aussprache mit Recht für die besten hält, so weichen doch beide noch immer in vielen Stücken von der wahren hochdeutschen Aussprache ab, die in der Rechtsprechung gelehrt werden muß.“

⁴⁸ „Johann Friedrich Heynatz ist [...] Befürworter des Märkischen als Leitvarietät.“

⁴⁹ „Die Märker sprechen oft falsch. Das ist nun eine Wahrheit, die ich nie werde leugnen wollen, und die ich um desto weniger zu leugnen nöthig habe, da ich in meiner Orthoepie die meisten Fehler der Märker frei angezeigt, und davor gewarnt habe.“

⁵⁰ „Das Verdienst seiner Grammatik, der besten norddeutschen des ganzen Zeitraums zwischen Gottsched und Adelung, liegt nicht in der grammatischen Theorie, sondern in der Observation. [...] Er ist, wenn man dem heutigen Sprachgefühl trauen darf, in der Erfassung des Sprachgebrauchs sogar Adelung überlegen, da er von analogistischen Velleitäten eben ganz frei ist.“

⁵¹ Vgl. Heynatz (1803) S. 5f.

⁵² Vgl. Ebd. S.11ff.

⁵³ Vgl. Ebd. S.15ff.

⁵⁴ „Einige Deutsche Mundarten ziehen überhaupt die Selbstlauter zu sehr.“

⁵⁵ ハイナッツが示す an はこの場合、分離前綴りの an を指す。それ以外の場合に発音される <an> はドイツ全域で <ann> のように発音されているとした。(z.B. an mich) (Vgl. Ebd. S.21)

⁵⁶ wohl と書く場合は、長音の発音以外にはありえないが、多くの人には Wohllust とは書かない上、そのように発音せず、Wollust と書き、発音するため、Wol は短音の発音となると述べている。(Vgl. Ebd. S.21)

⁵⁷ 相良(1958)では Lazarett [latsaret] と表記されている。

⁵⁸ Ort の母音は短音の発音であるが、Ortsthaler の発音は長音であるとしている。

⁵⁹ DUDEN (2015)では [ja:kt] となっている。

⁶⁰ „Heynatz unterscheidet nicht nur fünf e-Laute, drei lange und zwei kurze, sondern gibt auch Listen der Wörter mit offenem und geschlossenem e, soweit allgemeine Regeln nicht ausreichen.“

⁶¹ ハイナッツは hell と表現しても良いとした。(Vgl. Heynatz (1803) S.11)

⁶² ハイナッツは dunkel と表現しても良いとした。(Vgl. Ebd. S.11)

⁶³ Ebd. S.10f.

⁶⁴ „am Ende, wo es jedoch nur schnell und gelinde ausgesprochen wird“

⁶⁵ DUDEN(1990)では Beschäler と表記されている。

⁶⁶ DUDEN(1990)では Schram と表記されている。

⁶⁷ Vgl. Heynatz 1803 S.4

⁶⁸ „Die meisten rechnen auch das ä, ö, und ü unter die Doppellauter, und nennen sie ae, oe, und ue oder ui, welches aber falsch ist.“

69 „Die Doppellauter werden beständig lang oder gedehnt ausgesprochen; alle einfache Vokale aber sind zuweilen gedehnt, zuweilen kurz oder scharf.“

70 Vgl. Ebd. S.4f.

71 „Für ei ai zu sagen, ist beinahe allen Sachsen gemein. [...] Ei, sagen sie, ist aus demjenigen e, welches wie ä läutet, (also aus demjenigen e, welches ich in meiner Sprachlehre das offene nenne,) [...] können die Sachsen ein solches ei wegen der langen Gewöhnung an das ai gemeiniglich gar nicht einmal aussprechen.“

72 Vgl. Penzl (1977) S.81

73 Penzl (1977)は Gottsched (1762)より単語を引用している。詳細は Penzl (1977) S.81を参照されたい。

74 これらの正書法は DUDEN (1996)を参照した。

75 Vgl. Ebd. S.6

76 Vgl. Jellinek (1914) S.25

77 „Im Druck wird indessen anstatt Ä, Ö, Ü gemeiniglich Ae, Oe, Ue gefunden, die also von dem durch e verlängerten a, o und u wohl zu unterscheiden sind. In den kleinen Buchstaben aber ist ä, ö, ü, für ae, oe, und ue fast durchgängig angenommen. [...] Um ä, ö und ü durch einen besondern Namen von den übrigen Vokalen zu unterscheiden, kann man sie unreine, und hingegen a, o, u, aus welchen sie entfernen, reine Vokale nennen. Die Verwandlung der reinen Vokale in unreine nennt man den Umlaut.“

78 Vgl. Ebd. S.11, 23f.

79 Vgl. Adelung (1793) Vorrede S. v

80 Vgl. Strohbach (1984) S.235

81 ハイナッツは x と z は他の 2 つの子音でその発音を表現できるので、この 2 つの綴りを二重子音と呼んだ。つまり、x は<ks>に z は<ts>, <ths>, <ds>と発音されるとした。

(Vgl. Ebd. S.25)

82 Vgl. Ebd. S.31

83 „Heynatz und Mäzke, die beide aus Gegenden stammen, wo stimmhafter Konsonantismus herrscht, begnügen sich nicht mit allgemeinen Bemerkungen über das Verhältnis der 《weichen》 zu den 《harten》 Lauten, sondern geben genau an, in welchen Fällen b,d,g wie p,t,k(ch) lauten und wo sie in scheinbar gleicher Stellung den weichen Laut behalten.“

84 Heynatz (1803) S. 30

85 „Vornemlich verdient unter den Fehlern der Aussprache noch angeführt zu werden, daß ein gebohrner Sachse, wenn er in einen grammatischen Streit verwickelt wird, wo er oft die Buchstaben mit ihren gewöhnlichen kurzen Namen (be, ce usw.) nennen muß. das p und b, imgleichen das t und d immer so undeutlich aussprechen wird, [...] Folgt daraus nicht augenscheinlich, daß der junge Märker ein feiners Ohr habe, als der Sachse?“

86 „Ph, f und v sind zwar in den meisten, und t und th in allen Fällen gleichlautend, die übrigen breiten, weichen, harten, gehauchten Buchstaben hingegen muß man desto sorgfältiger unterscheiden, weil fast alle Gegenden Deutschlands hierinn wichtige Fehler begehen.“

87 Vgl. Heynatz (1803) S.29f.

88 Vgl. Heynatz (1803) S.30

89 „Das r wird von vielen, welche die Spitze der Zunge unter die untern Zähne ansetzen, oder sie gar hinten in den Mund zurückziehen, anstatt sie an das Zahnfleisch der obern Zähne anstoßen zu lassen, beinahe wie w oder h, und von andern, welche die Spitze der Zunge an den Gaumen setzen, beinahe wie l ausgesprochen. Der erste Fehler heißt das Schnarren, den andern könnte man das Lallen nennen. Andre sprechen

das einfache r beinahe doppelt; hart wie harrt, reden wie rreden. Rh klingt im Deutschen völlig wie r; Rhein wie rein.“

⁹⁰ Vgl. DUDEN (2015) S.50ff.

⁹¹ „Das ig am Ende klingt in den meisten Deutschen Provinzen nicht wie ik, sondern wie ich, so wie überhaupt g nach einem kurzen Vokal, wenn t folgt, wie ch lautet, z.B. in Agtstein“

⁹² Vgl. DUDEN (2015) S.101

⁹³ „Sch muß man weder wie ein Französisches ge aussprechen, noch mit den Westfalen u. a. es vor einem Selbstlauter in s und ch oder in s und k zertheilen, noch vor l, m, n und w es nur wie ß aussprechen.“

⁹⁴ Vgl. Ebd. S.36

⁹⁵ Vgl. Ebd. S.39

⁹⁶ Vgl. DUDEN (2015) S.120

⁹⁷ Vgl. Ebd. S.45 この規則の例外についても同じく参照されたい。

⁹⁸ Vgl. DUDEN (1995) S.38f.

⁹⁹ Vgl. DUDEN (2015) S.121

¹⁰⁰ „Das ß ist ein scharfes s, nur steht es am Ende der Sylbe und vor einem t bei den meisten für ein doppeltes s, wovon es sonst in der Aussprache eben sowohl, als vom einfachen s, genau zu unterscheiden ist, so daß z.B. große ganz anders lautet, als Rose und Rossen.“

¹⁰¹ Vgl. Ebd. S. 38f

¹⁰² Reises が正しい綴りとしながらも、ここでは Reißes と表記されている。

¹⁰³ Kuss が正しい綴りだとしながらも、ここでは Kuß と表記されている。

¹⁰⁴ „[...] macht er eine Reihe interessanter Beobachtungen, wobei es ihm, seiner Eigenart entsprechend, nicht auf genaue physiologische Beschreibung ankommt, sondern nur auf die Feststellung von Unterschieden in der Aussprache, die durch die Schrift verhüllt werden.“

¹⁰⁵ Vgl. Wolff (1999) S.182ff,

¹⁰⁶ Vgl. Ernst (2012) S.208f.

¹⁰⁷ ドゥーデンはその名がそのまま辞書のタイトルとなっているため、人名を指す場合はカタカナでドゥーデンと表記し、辞書のタイトルを指す場合は DUDEN と表記する。

¹⁰⁸ Vgl. Ehrlich (2008) S. 26

¹⁰⁹ Vgl. Ebd. S.27

¹¹⁰ „Konrat Duden schaffte es damit, keine neuen Rechtschreibregeln zu erfinden, sondern lediglich den bestehenden Gebrauch seiner Schüler zu erfassen, Abweichungen zu notieren und darauf aufbauend eine – ursprünglich nur für den eigenen Schulgebrauch gedachte – gültige Norm zu entwickeln.“

¹¹¹ Vgl. Ehrlich (2008) S.29

¹¹² „1. Das beste Hochdeutsch wird in Norddeutschland gesprochen. 2. Das beste Hochdeutsch wird im ersten Drama auf der Bühne gesprochen.“

¹¹³ Vgl. Ernst (2012) S.225

¹¹⁴ „Mit der Verbreitung des klassischen Bühnendramas gegen Ende des 18. und Anfang des 19. Jahrhunderts brachen weitläufige Veränderungen in der Kunstsparte heran, die sich letztendlich auch in der deutschen Aussprache widerspiegeln mussten“

¹¹⁵ Vgl. Ernst (2012) S.195

¹¹⁶ Vgl. Siebs (1944) S.2

¹¹⁷ 日本語タイトルは江沢 (1968) S. 5 参照した。

¹¹⁸ Vgl. Ehrlich (2008) S. 32

¹¹⁹ „Viëtor lehrte, was Siebs einige Jahre später brachte.“

¹²⁰ Vgl. 江沢 (1968) 8頁, Hollmach (2007) S.63, Ehrlich (2008) S.31

¹²¹ Vgl. Ebd. S. 34

¹²² 議論の詳細は Ebd. S.58ff.を参照されたい。

¹²³ „Der Verlauf der Entstehungsgeschichte der Bühnenaussprache, die am sprachlichen Gebrauch der Schauspieler vorwiegend vom Niederdeutschen geprägt war, [...] macht folglich den Eindruck, dass die gesprochene Varietät im niederdeutschen Raum (also im Norden Deutschlands, in Städten wie Bremen, Hannover, Mecklenburg) der heutigen standarddeutschen Aussprache am nächsten ist.“

¹²⁴ „Duden und Siebs bestimmten fortan den in der Schule gelehrt und für Drucker wie Behörden verbindlich „amtlichen“ Sprachstandard.“

¹²⁵ „Basierte die Bühnenaussprache auf dem Gebrauch der Kraftstimme, die in der Alltagssprache ihre Anwendung durchwegs verfehlte.“

¹²⁶ Vgl. Hollmach (2007) S.75

¹²⁷ ジープスは 1941 年に亡くなるため、それ以降の『舞台発音』の編纂はジープスの遺族であった Helmut de Boor などらによって行われた。

¹²⁸ Vgl. Ehrlich (2008) S.38

¹²⁹ 高橋 (2014) 40 頁参照

¹³⁰ „dass neben der „Bühnenhochlautung“ zwar wesentliche Grundzüge der „gemäßigten Hochlautung“ abgehandelt wurden, diese Regelungen jedoch keinen Eingang ins Wörterverzeichnis fanden, da man der Bühnenhochlautung noch immer höchste Priorität einräumte.“

¹³¹ „dass „Hoch-“ erneut Assoziationen in Richtung „obere Sprachschicht“ hervorrufen könnte.“

¹³² „gleichzeitig eine Abwertung von anderen Sprachvarietäten (z.B. Umgangssprache, Mundart) zur Folge hat.“

¹³³ Vgl. Ehrlich (2008) S. 40

¹³⁴ Ebd. S. 15

¹³⁵ „Die deutsche Standardsprache ist unmittelbar im gegenwärtigen Sprachgebrauch verankert.“

¹³⁶ „1. Sie ist eine Gebrauchsnorm, die der Sprechwirklichkeit nahe kommt. Sie erhebt jedoch keinen Anspruch darauf, die vielfältigen Schattierungen der gesprochenen Sprache vollständig widerzuspiegeln. 2. Sie ist überregional. Sie enthält keine typisch landschaftlichen Ausspracheformen. 3. Sie ist einheitlich. Varianten (freie Varianten und Phonemvariation) werden ausgeschaltet oder auf ein Mindestmaß beschränkt. 4. Sie ist schriftnah, d.h., sie wird weitgehend durch das Schriftbild bestimmt. 5. Sie ist deutlich, unterscheidet die Laute einerseits stärker als die Umgangslautung, andererseits schwächer als die zu erhöhter Deutlichkeit neigende Bühnenaussprache.“

¹³⁷ „1. Sie ist eine Gebrauchsnorm, die der Sprechwirklichkeit nahe kommt, weil sie sich wesentlich auf Ergebnisse empirischer Methoden stützt (Sprachkorpora, Umfragen) und neben dem Sprachgebrauch von überregional tätigen Berufssprecher(inne)n auch die in der Bevölkerung übliche Standardaussprache berücksichtigt. 2. Sie enthält in der Mehrzahl überregional gebräuchliche Ausspracheformen, aber auch solche, die innerhalb des deutschen Sprachraums nur national oder großregional üblich sind. [...]. 3. Sie wird phonologisch grundsätzlich einheitlich dargestellt, d.h., systematische phonetische und phonologische Variation, wie sie vor allem zwischen den nationalen und regionalen Varietäten der Standardsprache besteht, muss aus darstellungsökonomischen Gründen im Wörterverzeichnis weitgehend ausgeblendet werden [...] Unsystematische bzw. nicht regelhaft auftretende Variation auf Phonemebene wird allerdings, wo etwas über sie bekannt ist, abgebildet. 4. Sie ist zwar in ihren Grundzügen schriftnah, folgt aber im Zweifelsfall auch dem tatsächlichen Sprachgebrauch, wenn dieser Diskrepanzen zu regelhaften Schreibungs-Aussprache-Korrespondenzen aufweist.“

- 138 „Die Bühnenaussprache ist eine ideale Norm”
- 139 高橋 (2014) S.40
- 140 „Jedoch ist keine Sprachform der anderen überlegen, besser oder schlechter gestellt.”
- 141 „Varietäten stellen sprachliche (linguistische) Systeme dar, die durch einzelne Einheiten die Varianten bestimmt werden.”
- 142 Vgl. Hollmach (2007) S. 30
- 143 Vgl. Wolf (2013) S.21
- 144 „Bereits Gottsched und Adelung hatten sich in Bezug auf umgangssprachliche Formen sehr vage ausgedrückt.“
- 145 „Die Gelegenheit, welche ich habe, in einer öffentlichen Schule viele Sprach- und Schreibfehler zu verbessern, fehlet manchem, dessen Bemerkungsgeist den meinigen vielleicht weit übertrifft.”
- 146 „Bei der Fehlerkorrektur in der Schule ist die Sache unmittelbar relevant, sowohl für die korrigierenden Lehrer als auch für die korrigierten Schüler.“
- 147 Hollmach (2012), Takahashi (1996)も発音規範として取り扱うのはヴィエトールあるいはジープス以降である。
- 148 Vgl. Hollmach (2007) S.40
- 149 Vgl. Ebd. S.61ff.
- 150 „so bald es möglich sein will, an das Tageslicht!”
- 151 „Richtige Darstellung der sprachlichen Tatsachen ist ihm die Hauptsache.”
- 152 Vgl. Günter (1999) S.52
- 153 „ein wichtiges Korrektiv im alltäglichen Sprachgebrauch”

参考文献

(一次文献)

- Adelung, Johann Christoph (1774): *Versuch eines vollständigen grammatisch-kritischen Wörterbuches der hochdeutschen Mundart*. 5. Bde., 1. Aufl. Leipzig
- Adelung, Johann Christoph (1793): *Grammatisch-kritisches Wörterbuch der hochdeutschen Mundart*. 4. Bde., 2. Aufl. Leipzig
- DUDEN (1990): *Das Aussprachewörterbuch*. 4., völlig neu bearb. u. erw. Aufl. Dudenverlag. Mannheim, Wien, Zürich
- DUDEN (2015): *Das Aussprachewörterbuch*. 7., komplett überarb. u. akt. Aufl. Dudenverlag. Berlin
- Gottsched, Johann Christoph (1748): *Grundlegung der deutschen Sprachkunst*. 6. Aufl. Leipzig
- Heynatz, Johann Friedrich (1771-76): *Briefe, die deutsche Sprache betreffend*. 6 Bde., Berlin
- Heynatz, Johann Friedrich (1785): *Anweisung zur Deutschen Sprache. Zum Gebrauch beim Unterricht der ersten Anfänger*. Berlin
- Heynatz, Johann Friedrich (1803): *Deutsche Sprachlehre zum Gebrauch der Schulen*. 5. Aufl. Hildesheim [Nachdruck (2007): *Documenta Orthographica*. 7.Bd., Georg Olms. Hildesheim.]
- Schottel, Justus Georg (1641): *Teusche Sprachkunst*. Braunschweig. [1st edition]
- Schottel, Justus Georg (1663): *Ausführliche Arbeit von der Teuschen HauptSprache*. Braunschweig.
- Siebs, Theodor (1898): *Bühnenaussprache*. Berlin u.a.

(二次文献)

- ADB (1880) = *Allgemeine Deutsche Biographie*. 12. Bd. Hrg v. der historische Commission bei der Königl. Akademie der Wissenschaften. Leipzig. Duncker & Humblot
- Berner, Elisabeth (2009): *Niederdeutsch – Brandenburgisch – Berlinisch – Standardsprache: Entwicklungstendenzen im regionalen Varietätengefüge*. [Sprachwandel und Entwicklungstendenzen als Themen im Deutschunterricht: fachliche Grundlagen – Unterrichts Anregungen – Unterrichtsmaterialien. Potsdam S.121-140]

- Ehrlich, Karoline (2008): *Wie spricht man „richtig“ Deutsch? Kritische Betrachtung der Aussprachenormen von Siebs, GWDA und Aussprache-Duden*. Walter de Gruyter. Wien
- Deust, Johann Kasper (1773): *Zweiter Theil der Heynatzischen Deutschen Sprachlehre zum Gebrauch der Schulen, oder Anmerkungen über die selbe mit einer Zugabe und einem Inhalte*. Liegnitz
- DUDEN (1995): *Die Grammatik: Unentbehrlich für richtiges Deutsch*. 5., völlig neu bearb. Auflage. Dudenverlag. Mannheim, Leipzig, Wien, Zürich
- DUDEN (1996): *Die deutsche Rechtschreibung*. 21. völlig neu bearb. u. erw. Auflage. Dudenverlag. Mannheim, Wien, Zürich
- Ernst, Peter (2005): *Deutsche Sprachgeschichte: Eine Einführung in die diachrone Sprachwissenschaft des Deutschen*. 1. Aufl. UTB. Stuttgart
- Ernst, Peter (2012): *Deutsche Sprachgeschichte: Eine Einführung in die diachrone Sprachwissenschaft des Deutschen*. 2. aktual. u. erw. Aufl. UTB. Stuttgart
- Fanninger, Kurt (1996): *Johann Siegmund Valentin Popowitsch: Ein österreichischer Grammatiker des 18. Jahrhunderts*. Peter Lang
- Günther, Jahn (1999): *Johann Friedrich Heynatz – ein vergessener Gelehrter, Schulmann und Gartenfreund der Aufklärung*. [In: Hrg. v. Verein der Freunde und Förderer des Museums Viadrina Frankfurt (Oder) e. V., *Frankfurter Jahrbuch 1999*. Verlag Die Furt. S49-64]
- Hollmach, Uwe (2007): *Untersuchungen zur Kodifizierung der Standardaussprache in Deutschland*. Frankfurt a.M. Peter Lang.
- Jellinek, Max Hermann (1913-14): *Geschichte der neuhochdeutschen Grammatik von den Anfängen bis auf Adelung*. Erster Halbband, Carl Winter's Universitätsbuchhandlung Heidelberg
- Kant, Immanuel (1977): *Werkausgabe* 12.Bd. Frankfurt am Main (In: *Suhrkamp Taschenbuch Wissenschaft* Nr. 193)
- Klein, Peter Wolf (2013): *Warum brauchen wir einen klaren Begriff von Standard-sprachlichkeit und wie könnte er gefasst werden?* (In: Hrg. v. Hagemann, J u.a. (2013): *Pragmatischer Standard* Tübingen. S. 15-33.)
- König, Werner (1994): *dtv-Atlas zur deutschen Sprache. Tafeln und Texte*. München: dtv.

- Nikolai, Friedrich (1772): *Allgemeine deutsche Bibliothek*. 16. Bd., Berlin und Stettin
- Paulsen, Friedrich (1921): *Geschichte des gelehrten Unterrichts : auf den deutschen Schulen und Universitäten vom Ausgang des Mittelalters bis zur Gegenwart*. 2. Bd., 3. erw. Aufl. Walter de Gruyter
- Penzl, Herbert (1977): *Gottsched und die Aussprache des deutschen im 18. Jahrhundert*. [Sprachwissenschaft 2.Bd., Heidelberg S. 61-92]
- Reiffenstein, Ingo (1985): *Metasprachliche Äußerungen über das Deutsche und seine Subsysteme bis 1800 in historischer Sicht*. [In: Hrg. v. Besch u.a., (2003): *Sprachgeschichte – Ein Handbuch zur Geschichte der deutschen Sprache und ihrer Erforschung – 2., vollständig neu bearb. u. erw. Aufl. 3.Bd., Berlin. New York. Walter de Gruyter S. 2205-2229]*
- Scharloth, Joachim (2003): *Der Deutschfranzose. Zu den mentalitätsgeschichtlichen Bedingungen der Sprachnormierungsdebatte zwischen 1766 und 1785*. Frankfurt am Main u. a. ["Standardfragen". *Soziolinguistische Perspektiven auf Sprachgeschichte, Sprachkontakt und Sprachvariation*. Festgabe zum 60. Geburtstag von Klaus Jochem Mattheier. S. 27-49]
- Scharloth, Joachim (2005): *Sprachnormen und Mentalitäten. Sprachbewusstseinsgeschichte in Deutschland im Zeitraum von 1766 und 1785*. Niemeyer. Tübingen
- Schwarze (1873): *Geschichte des ehemaligen städtischen Lyceums zu Frankfurt a. O. von 1329-1813*. Frankfurt a. O.
- Siebs, Theodor (1944): *Deutsche Bühnenaussprache. Hochsprache*. Frederick Ungar Publishing Company. New York
- Trenschel Walter (1997): *Die Standardsprache und phonetische Haupteigenheiten im Norddeutschen* [In: Hrg. v. Haase, M./Meyer, D (1997): *Von Sprechkunst und Normphonetik. Festschrift zum 65. Geburtstag von Eva-Maria Krech am 6. November 1997*. Verlag Werner Dausien. Hanau und Halle 1997]
- Viëtor, Wilhelm (1885): *Die Aussprache der in dem Wörterverzeichnis für die deutsche Rechtschreibung zum Gebrauch in den preußischen Schulen enthaltenen Wörter*. Heilbronn . Henninger.
- Wolff, Gerhart (1999): *Deutsche Sprachgeschichte. Ein Studienbuch*. 4. Aufl. UTB. Stuttgart

- 江沢建之助 (1968) 「Viëtor と Siebs」(日本独文学会 『ドイツ文学』 第 41 号 1～10 頁)
- 神竹道士 (2006) 「J. F. ハイナッツと 18 世紀の標準ドイツ語」(『人文研究』大阪市立大学大学院文学研究科紀要 第 57 卷 137～148 頁)
- 神竹道士 (2011) 「<r>音からみたドイツ語発音規範の推移」(大阪市立大学ドイツ文学会 『セミナリウム』 第 33 号 77～95 頁)
- 相良守峯 (1958) 『大独和辞典』博友社
- 佐藤恵 (2017) 「18・19 世紀の上部ドイツ語圏における言語規範意識 —新聞と書簡・筆談帳における wegen の格支配を例にして」(『学習院大学ドイツ文学会 研究論集』第 21 号 19～43 頁)
- 重藤実 (2017) 「ドイツ語標準語と辞書」(東京大学大学院人文社会系研究科ドイツ語ドイツ文学研究会 『詩・言語』 第 83 号 9～16 頁)
- 高田博行・新田春夫 (2013) 『講座ドイツ言語学 第 2 卷 ドイツ語の歴史論』ひつじ書房
- 高橋希衣 (2014) 「ドイツ語標準発音とハレ大学の発音辞典：音声・音韻記述の通時的考察」(小樽商科大学言語センター 『language studies』 第 22 号 39～47 頁)
- 田中文憲 (2013) 「ドイツ的教養 German education : Bildung」(『奈良大学紀要』 第 41 号 13～38 頁)

Zusammenfassung

J.F. Heynatzens „Rechtsprechung“ und ihre
terminologische Überlegenheit im 18. Jahrhundert

Ayami Morimura

Über Standarddeutsch bzw. Hochdeutsch wurde seit dem 18. Jahrhundert häufig diskutiert, da mit dem Beginn der Aufklärung von den Deutschen neben dem Hebräischen, Griechischen und Lateinischen auch Deutsch als maßgebliche Sprache anerkannt wurde. Folglich schrieben viele Sprachforscher wie Johann Christoph Gottsched (1700-1766) Anleitungen zur Abfassung von Dichtungen und Sprachkunstwerken. Gegen Ende des 18. Jahrhunderts gab Johann Christoph Adelung (1732-1806) mit seinem *Versuch eines vollständigen grammatisch kritischen Wörterbuches der hochdeutschen Mundart* (1774) „das erste vollständige Wörterbuch der deutschen Sprache“ (Ehrlich 2008:24) heraus, womit ein großer Schritt in Richtung Vereinheitlichung der deutschen Rechtschreibung getan wurde. Im Gegensatz zur Rechtschreibung wurde jedoch die „Rechtsprechung“ bzw. Standardaussprache kaum thematisiert, obwohl nicht nur die Rechtschreibung, sondern auch Ausspracheregeln für die Normierung der Standardsprache festgelegt werden mussten. Hinsichtlich der Normierung der Aussprache setzte die Diskussion erst im 19. Jahrhundert richtig ein. Großen Einfluss übte die *Bühnenaussprache* (1898) von Theodor Siebs auf die Vereinheitlichung der Aussprache aus. Das bedeutet, dass die Aussprachenorm erst etwa 100 Jahre später als die Vereinheitlichung des schriftlichen Deutsch bestimmt wurde.

Die vorliegende Arbeit handelt von den erwähnten Normierungsprozessen der Aussprache im 18. Jahrhundert. Insbesondere versuche ich, den norddeutschen Sprachforscher Johann Friedrich Heynatz (1744-1809) und dessen Erforschung der „Rechtsprechung“ aus heutiger phonetischer Sicht zu analysieren.

Über Heynatz' Leben ist wenig bekannt. Nach seinem Studium an den Universitäten zu Halle und Frankfurt an der Oder war er ab 1769 Lehrer am Gymnasium zum Grauen Kloster in Berlin. Von 1775 bis zu seinem Tod war er Rektor des städtischen Lyceums in Frankfurt/Oder und bekleidete seit 1791 gleichzeitig

das Amt des außerordentlichen Professors der Beredtsamkeit und der schönen Wissenschaften an der dortigen Universität. Als Schulmann führte er in philanthropischer Ansicht seine Pädagogik. Im Zuge dessen engagierte er sich auch für die Verbesserung der deutschen Sprache zum „Ziel der Erziehung in der Brauchbarkeit des Menschen für die Gesellschaft“ (Günther 1999:50).

In seinem Lehrbuch, *Deutsche Sprachlehre zum Gebrauch der Schulen* (1770) unterteilte Heynatz seine Grammatik in fünf Kategorien: Rechtsprechung/Orthoepie, Rechtschreibung/Orthographie, Etymologie, Syntax und Prosodie. Das bemerkenswerte an der Rechtsprechung, die aus 85 Regeln besteht, ist, dass diese Regeln fast ausschließlich von seinen „Sprachbeobachtungen“ abgeleitet wurden. Heynatz konzentrierte sich sozusagen auf die alltägliche Aussprache und versuchte so, einheitliche Ausspracheregeln zu verfassen.

In der Diskussion um die Vereinheitlichung der deutschen Sprache im 18. Jahrhundert, und hier besonders auffällig bei Gottsched und Adelung, wurde im Allgemeinen nur die künstlerische Sprache als wertvoll angesehen, weil die Literatursprache von vielen damaligen Gelehrten als das nachahmenswerte Vorbild verstanden wurde. Im Gegensatz dazu wurde die Alltagssprache kaum für beachtenswert empfunden. Darum wurde auch Heynatz' Sprachforschung meist vernachlässigt. Den „idealen“ Normbegriff kann man auch in der *Bühnenaussprache* finden, die eine einheitliche Aussprache für Schauspieler bestimmt. Trotz der Differenz zwischen der Aussprache auf der Bühne und dem Sprachgebrauch im Alltag wurde die Bühnenaussprache in der Schule oder in amtlichen Behörden weitgehend akzeptiert. Ein sich am alltäglichen Sprachgebrauch orientierender neuer Normbegriff entwickelte sich gegen Mitte der 1960er Jahre. Aufgrund neuerer sprachwissenschaftlicher Untersuchungen schlug Hans Krech (1885-1961) in seinem Buch *Beiträge zur deutschen Ausspracheregulung* (1961) eine Standardaussprache vor, die der Sprachwirklichkeit einer größeren Personengruppe näher kam. Gleichzeitig erschien auch das *Aussprachewörterbuch* (1962) der DUDEN-Reihe, in dem die Standardaussprache nach der „Gebrauchsnorm“ dargestellt wurde.

Wenn man sich tiefergehend mit der Entwicklung des Begriffs „Standardsprache“ auseinandersetzt, erscheint Heynatz' „Rechtsprechung“ – so meine These –

als zukunftsweisender Normbegriff. Genau wie die Krechs und des DUDEN basierte schon Heynatz' „Rechtsprechung“ auf dem tatsächlichen alltäglichen Sprachgebrauch. Darüber hinaus stimmt auch seine Toleranz gegenüber Sprachvarietäten mit dem heutigen Normbegriff überein. Insofern verdient es Heynatz, als „ein vergessener Gelehrter“ (Günther 1999:49) – in dieser Arbeit in den Fokus der Aufmerksamkeit gerückt worden zu sein.